

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 13-5

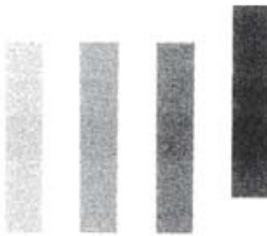
## 学校体験

### 目 次

子どもにとっての「学校」 ..... 深谷昌志	2
〔調査レポート〕 学校体験	
はじめに .....	8
調査概要 .....	8
第1部 子どもにとっての学校体験の意味	
要約 .....	10
1. 学校はどんなところだったか .....	14
●学校の楽しさ .....	14
●一日の生活の中で .....	16
●行事の楽しさ .....	20
●楽しかったこと、つらかったこと .....	23
2. 授業中の体験 .....	26
●授業中の楽しさ .....	26
●教科の好き嫌い .....	27
●授業中の体験 .....	30
3. 友や教師とのふれあいの中で .....	37
●友だちとの関係 .....	37
●教師とのふれあい .....	41
4. 学校は何を与えてくれたか .....	44
●学校で身につけたこと .....	44
●未来像と自己像 .....	48
●自己像を高くもつ子の分析 .....	50
第2部 母親たちの学校体験	
1. 小学校体験を振り返って .....	56
●強烈に思い出される体験 .....	56
●成長に役立った体験 .....	59
2. わが子の小学校体験 .....	63
●小学校時代とてもよかったと思えること .....	63
●おとなになっても思い出せる一番の思い出 .....	66
●母親としての学校に対する希望 .....	67
〔対談〕 自由教育と学校改革 ..... 中野 光 vs 深谷昌志	
	73
資料1 調査票見本および集計結果 .....	82
資料2 調査票見本（保護者用） .....	95

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# 子どもにとっての「学校」



静岡大学教授  
深谷昌志

## 楽しさを支えるのは友とのふれあい

子どもたちが登校してくる。義務教育だから仕方なく登校するのかもしれない。しかし子どもにとって、学校で過ごす時間はきわめて長い。そうした学校に子どもたちは、どういう気持ちで通学してくるのか。

毎日のように登校してくる学校。その学校に充足感を見いだせない子どもたちが増加しているという。本レポートでもくわしい結果が紹介されるが、それとは別に、東京近郊の小学6年生2,000名に、学校へ来る楽しさをたずねたところ、次の結果が得られた。

①とても楽しい	10	29%
②かなり楽しい	19	
③やや楽しい	36	
④半分半分	20	
⑤ややつまらない	6	
⑥かなりつまらない	5	15%
⑦とてもつまらない	4	

考え方にもよるが、6割強の子どもたちが

学校に楽しさを見いだしており、その限りでは、世間で言われるほどには学校の地盤が沈下していないような印象を受ける。

しかし学校生活を、①勉強の面、②先生との関係、③友だちづきあいに分け、それぞれの楽しさをたずねると、①15%、②21%、③55%（「とても」「かなり」楽しいと答えた割合）となる。学校の楽しさを支えているのが友だちづきあいであることを示す数値だが、先ほどの数値に、「やや楽しい」を加えると、①39%、②41%、③85%と、友だちのもつ重みが、ますます強まってくる。

もっとも、勉強の楽しさについては、図1のように学業成績との間に高い相関が認められ、成績が下位になるにつれて授業の楽しさを味わえる子どもの割合が減り、成績が「うしろのほう」の子の場合、「やや」を含めても、勉強が楽しい子どもは17%にすぎない。

「どの子にもわかる授業」あるいは「落ちこぼれをつくらない授業」を提唱するのはやさしい。しかしこれは、言うはやさしく行きがたいものであろう。教わる内容がわかっ

### 子どもにとっての「学校」

ていれば、授業に楽しさを感じられるが、勉強が不振ぎみになると、授業は苦行の一種とならざるをえない。

ここでは、勉強が苦手な子にも興味のもてる授業をいかにつくりだしていくべきかを論ずるつもりはない。しかし、そうした努力を重ねたとしても、図に示した傾斜がややゆるやかになる程度で——そのこと自体はとても大事だと思うが——基本的な構図が変化することはあるいはあるまい。

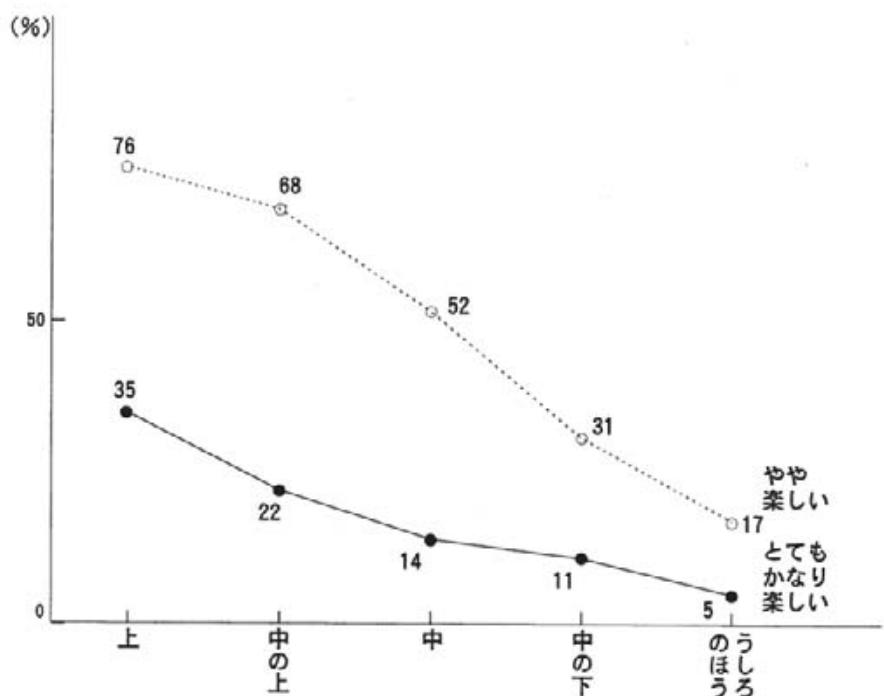
つき放した言い方をしてしまうと、勉強の苦手な子にとって、学校は本来なじみにくい場なのかもしれない。それにもかかわらず、そうした子どもたちも、「学校は楽しい」と答えている。友だちとふれあう機会をもてることが、学校の魅力を形づくっているからである。

そこでもう少し角度を変えて、学校生活の時間帯別に、楽しさの度合いをたずねると、以下のような結果が得られる。

①屋休みに遊んでいるとき	71%
②授業の終わったあと	67%
③体育の時間	60%
④図工の時間	51%
⑤5分（あるいは10分）休み	29%
⑥社会の時間	25%
⑦国語の時間	23%
⑧算数の時間	21%
⑨給食の時間	19%
⑩授業の始まる前	12%
⑪道徳の時間	9%
⑫児童会の時間	8%
⑬掃除の時間	8%
(7段階尺度の中で「とても」「かなり」) 楽しいと答えた割合	

この中で、屋休みが楽しみというのは、いつの世にも変わらぬ子ども心であろう。また体育や図工など、体を動かす時間が楽しみなものも理解できる気持ちがする。その一方で、国語や算数に楽しみを見いだせない子どもが

図1 勉強の楽しさ × 成績



多いのは、すでにふれた学力との関係や授業の性格からいって、ある程度、やむをえないようにも思われる。

それにひきかえ、給食や児童会、道徳の時間などの評価が低いのはなぜであろうか。いまでもなくこれらの時間は、時間の使い方に制約が少なく、子どもたちも自由にふるまえる可能性が強い。それだけに楽しさの比率が、もっと増してよいように思う。

### 先生抜きの給食のほうが楽しい

そこで特活の時間に、どうして魅力を感じないのかを、給食に例をとって、考えてみたい。

小学3～6年生、約1,500名を対象として給食についての意識調査を試みたことがある。

給食の時間の楽しさを、学年ごとに集計し直すと、小3=42%、小4=35%、小5=21%、小6=15%のように、学年が上がるにつれて、給食の楽しさが減少している。それと同時に、数値は省略するが、「おいしくない」「いつも同じようなおかずばかり」「ご飯がぐしゃぐしゃしている」などの不満が目についた。

年齢が上がるにつれて、味覚が洗練されてきたというべきか、あるいは同じ味つけにあきがきたと考えるか、いずれにせよ、給食に楽しさを感じられない子どもが増えるのは、すでに述べたとおりである。

このところ給食の献立に工夫がこらされ、一昔前より味のレベルは向上してきている。しかし、それでもレストランの味とは言いにくい。しかし、味への不満が原因のすべてではないらしい。給食の時間のいくつかのスタイルを示して、どの型を望むのかをたずねたところ、以下のような結果が得られている。なお、この項目は設問内容がむずかしいので、小学5～6年生のみに実施した。

- |                            |     |
|----------------------------|-----|
| ①好きな友だちどうしが、自由に席をとつて、食事をとる | 62% |
| ②班ごとに集まって食事をとる             | 23% |

③クラスの全員が向かいあう形	8%
④椅子はそのままの形	7%
当然といえばそれまでだが、子どもたちは友だちどうして雑談をしながら、食事をとするスタイルを望んでいる。	
もう一問、教師との関係をたずねると、	
①出張などで、先生が不在のため、仲間どうしで食べる	56%
②先生が、どこかの班へ入ってしゃべりながら	18%
③先生が、みんなに、いろいろなことを話しながら	17%
④先生が、行儀の悪い人を注意しながら	
	9%

のとおりである。

もちろん、この結果も、クラスによって数値に開きが認められ、①の教師不在型の給食について、5～6年生21学級のうち、もっとも高いクラスでは79%と、8割の子どもが教師不在を望んでいる場合もあったが、逆に、28%と、そう思う子どもが3割。つまり教師がいないと寂しいという学級もあった。

したがって、担任と子どもとの心のつながりが強まるとき、教師とともに給食を望む場合が生ずるのは、前記の数値からも確かだが、しかし全体としてみると、子どもたちが自分たちだけで過ごせる給食時間をもちたいと思っているように思われる。

この問題は、学校教育における給食の時間の位置づけに關係していく。

なぜなら、仮に給食を教育活動の枠外と考えるなら、子どもたちが仲間どうして楽しく食べるスタイルは、むしろ望ましい形といえよう。しかし、算数や国語の授業と同じ程度の教育的な配慮が必要な時間とするなら、子どもたちの気持ちはさておいても、教育目標を徹底させるべきなのかもしれない。

以前、アメリカを訪れたとき、いくつかの学校で、学校給食に接する機会があった。昼休みになると、サック・ランチ（弁当）を持ってきていない子どもたちが、友だちどうして食堂へ集まってきた。大学のカフェテリアを

二回りくらい小さくした食堂には、牛乳やジュースがたくさん並べられており、子どもたちは好みのものをとって、思い思いに食事をとっていた。

メイン・ディッシュはハンバーグにポークビーンズ、それに生野菜。あるいは、ハンバーガーが2つとゼリーなど、いかにも子どもが好きそうなものばかりだった。

もちろん、この場合の給食は、完全に教育活動の対象外で、何人かの教師の姿もみられたが、食堂の利用者という感じで、子どもたちと雑談をしながら、ハンバーガーをかじっていた。

アメリカ行きの前に、パリの小学校を訪問する機会があった。パリでは、自宅へ帰って食事をとる子と弁当を持ってくる子、そして給食を食べる子の三通りがあり、共働きの家庭の子などが給食を利用しているようであった。

しかし給食といっても、スープからデザートまでつく献立で、日本なら、さしづめフルコースの西洋料理という感じの食事である。味のほうも、アメリカのファースト・フードレストラン的な大味なものではなく、町のビストロ程度の水準を保っていた。

こうした外国の給食風景と比較すると、日本の給食は、いかにも貧しい。プラスチックの皿にあれこれと盛りつけ、フォーク1本で食事をとるありさまは、文化的な雰囲気に欠ける。

もっとも学校給食のあり方は、ふつうのサラリーマンでも、ワインを飲みながら、1時間以上をかけて食事を楽しむパリと異なり、3~4分でラーメンや日本そばを食べ、あっという間に昼食が終わるわが国の状況を反映しており、学校だけに責任を問うのは筋違いなのかもしれない。

こうした考察はともあれ、何本かのフォークやナイフがセットされ、ナプキンのついたパリの食事は、それ自体がテーブル・マナーに象徴されるしつけの場としての効用を果たしているように思えた。また、アメリカの食

事風景ものびのびとしており、友とのふれあいの場として貴重な意味をもっていよう。

それにひきかえ、日本の給食は性格があいまいのように思える。友だちとのふれあいというには堅苦しいし、かといって、給食指導を看板にするには内容が粗末すぎる。結局、中身が乏しいだけに、かえって教師による管理の性格が強まってくる。

## 「授業外」の見直しを

先ほどの調査の中で、給食室をもち、たてわり給食をしている学校が1校だけあった。1年生から6年生までが、1つのテーブルにつき、男女12名で食事をとるスタイルである。

しかし、この学校の子どもたちの給食の時間に対する評価は、以下のとおりであった。

2年生	65%
3年生	49%
4年生	31%
5年生	11%
6年生	8%
(いずれも「とても」「かなり」楽しいと)	
答えた割合	

つまり、上級生から面倒をみてもらえる下級生たちは、給食の時間を楽しみにしているが、5~6年生は、たてわり給食をはっきり拒否している。

この方式だと、上級生は下級生の世話を追われ、友だちとふれあえるせっかくの機会が失われるというのである。

念のために、この学校の子どもたちに、給食の仕方についての意見を求めたところ、

①たてわり給食	26%
②クラスの友だちと食事をとる	74%
と、ほぼ4分の3が、クラスの友だちと食事をとりたいと答えていた。	

こうした反応を、子どもたちのわがままと考えるか、それとも子どもたちの素直な気持ちのあらわれとみなすかによって、学校としての取り組みが異なるてくる。

冒頭でふれたように、学校の楽しさを支え

ているのは友だちとのふれあいで、いわゆる授業場面に充実感を見いだしない子どもが少なくなかった。しかし考え方によっては、国語や算数の時間は、子どもたちから嫌われてもやむをえないよう思う。本来、そうした時間は、教師指導型のスタイルとならざるをえないから、関心をもてる子どもの割合は、ある程度は限られざるをえない。学校のもつそうした義務的な感じを補う手段として、休み時間や15分休みを活用するのも、1つの方法であろう。

しかし、そういうにしては、児童会の時間や掃除、給食、道徳の時間の楽しきが、算数や国語以下という事実が、何とも気がかりである。

その他の運動会や学芸会、修学旅行などを視野に含めても、こうした活動が楽しきや充足感に欠ける。加えて、教科の時間のように楽しくなくとも必要性が大きいといつてもない。いわば学校のもつ義務的な感じを助長し、学校の楽しきを奪う役割を担っているといえなくもない。

さらに、悲観的のことには、体育の場合はスポーツ好きの子、算数は算数の得意な子と、いうように、それぞれの時間帯には、その時間を中心となって支える子どもたちの層が認められるのに、掃除や給食などに関心をもつ子どもたちの核が存在しないのである。

仮に、学校を算数や国語などの「授業」と給食や掃除、運動会などの「授業外」——特活といつてもかまわないが——に分けるなら、どの子どもからも、重苦しい感じがして好きになれないと敬遠されているのが「授業外」の現状である。

したがって、アメリカの給食がそうであるように、「授業外」のかなりの部分を、教育活動の対象外とするのも、1つのいき方であろう。計算の仕方にもよるが、学校での生活時間のうち、ほぼ5割を「授業外」とそれに準ずる時間が占め、いわゆる教科の時間は残りの半分にすぎない。したがって「授業外」を教育活動の対象外とするなら、少なくとも学校では、友とのふれあいに多くの時間をさくのが可能になる。

もっとも、こうした指摘は暴論かもしれない。第2次世界大戦後の歩みを振り返ってみれば明らかのように、学級会や給食、運動会、文化祭、クラブなどは、それぞれの使命を担って登場してきた。そして、共同して作業をする体験をもたずに孤立しがちな子どもたちの現状を考えると、「授業外」的な活動に教育的な配慮をする必要性は増しこそすれ、決して減少はしていない。

したがって調査データを手がかりとすると、特活不要論にも似た感じを抱くのは、特活そのものが不要なのではなく、現在の特活が所期の目的を果たしていないからなのである。

こうした意味では、初心へ返り、まず子どもたちの声を聞くことから、特活の再生を図るべきであろう。

少なくとも、こうした方向へ改革が進むなら、子どもにとっての学校は、もう少し樂しくなるように思う。

いずれにせよ、日本の学校は堅苦しい雰囲気をもっているだけに、子どもの立場から学校の働く役割を見直す必要があるように思う。

[ 調査レポート ]

# 学校体験

静岡大学教授	深谷昌志
杉並区立杉並第六小学校教諭	土橋 稔
埼玉県立小川高等学校教諭	三枝 恵子
千代田区立千代田麹町小学校教諭	島田美佐江
練馬区立大泉第六小学校教諭	鶴巻景子



## ●はじめに

子どもたちの生活の中心を占めるのは学校生活である。学校では学習活動をはじめ、遠足・運動会・修学旅行などの行事や、教師や友だちとの人間的なふれあいの中で、子どもたちにさまざまな体験を与えていた。こうした学校で行われる活動は、それぞれの目的をもって計画実践がなされるが、子どもたちが受けとめてはじめて意味をもつものである。

そこで、子どもたちが学校での活動を通して、その体験をどう受けとめ、何を学び、またそれが、どんな成長に役立っているのかを、もう一度問い合わせようとしたのが本調査の目的である。

そこで今回は、子ども調査と母親調査を試み、両面から学校体験が子どもたちの成長発達に果たす役割を明らかにしようとしたものである。

## ●調査概要

1. 調査主題 学校体験
2. 調査視点 子どもたちは、学校でのさまざまな活動を通じ、その体験をどう受けとめ、何を学び、またそれが、どんな成長に役立っているのか。学校体験は子どもたちに何を与えたのか探ってみることを目的とした。
3. 調査項目 学校生活の楽しさ、行事の楽しさ、教科の好き嫌い、授業中の体験、友だちや教師とのふれあい、学校での体験が役立ったこと、いらない体験、自己像、将来像など。
4. 調査時期 1993年7月
5. 調査対象 第1部 東京・千葉の公立中学校 1年生1,771名(男子887名、女子884名)  
第2部 東京・千葉・埼玉の中学1年生をもつ母親256名
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査
7. サンプル数 第1部

(人)

男 子	女 子	合計
887	884	1,771

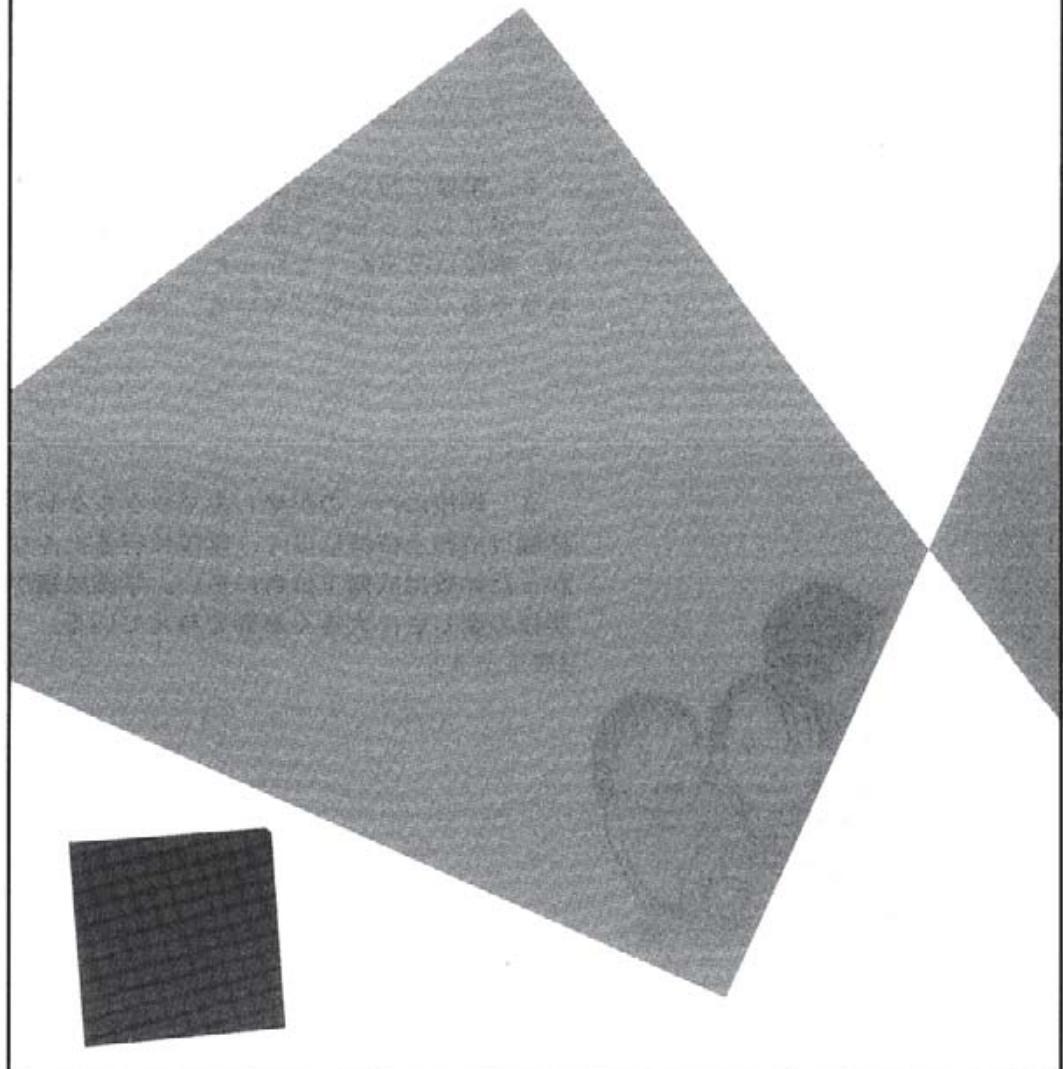
## 第2部

(人)

母 親	256
-----	-----

[ 第 1 部 ]

# 子どもにとっての 学校体験の意味



# ■ ■ ■ 調査レポート ■ ■ ■

## ■ ■ ■ 子どもにとっての学校体験の意味 ■ ■ ■

### ■ ■ ■ 要 約 ■ ■ ■

1. 小学校の生活が「とても楽しかった」と答えた子は49%、「わりと」を合わせると約9割の子どもたちが、学校生活が楽しかったと思っている。(表1-1)

2. 学校に行くのが楽しみでワクワクしたことが「しょっちゅうあった」子は22%、一方、学校に行きたくなかったことが「しょっちゅうあった」子も12%いる。(表1-2)

3. 学校に行くのが楽しみでワクワクした体験は成績上位群に多く、学校に行きたくなかった体験は成績下位群に多い。学業成績が学校の楽しさに大きく影響を与えている。(表1-4)



4. 一日の生活の中で「とても覚えている」出来事は、クラブ活動（49%）、休み時間（40%）、放課後（38%）である。学校に行くのが楽しみでワクワクした体験が「ショッちゅうあった」群ほど、小学校の頃のことをよく覚えている。（表1-5、1-6）



5. 学校行事では、修学旅行が「とても楽しかった」と答えた子が74%、「かなり」を合わせると約9割に達する。逆に、「ぜんぜん楽しくなかった」行事は、月曜の朝の全体集会（41%）、大掃除（35%）、卒業式の練習（33%）であった。学校に行くのが楽しみでワクワクした体験が「ショッちゅうあった」群では、さまざまな学校行事が楽しかったとする割合が高い。（表1-7、1-8）

6. 小学校の勉強が「とても楽しかった」と答えた子は13%、「わりと」を合わせると約6割。女子のほうがやや楽しい割合が高い。（表1-11）



7. 教科の好き嫌いでは、体育が最も好きな教科であった。教科の好き嫌いの性差は顕著であり、国語、音楽、家庭科は女子が好きな割合が高く、男子は、算数、社会、理科、体育が好きである。また成績の上位群では、算数、社会、理科が好きな教科で、下位群との差は大きい。（図1-4、表1-13）

## 調査レポート／子どもにとっての学校体験の意味

### 要 約

8. 授業中の体験では、体育の授業でいっぱい汗をかいたことが「しょっちゅうあった」子が47%、夢中になって運動したことがあった子が43%。その一方で、汗をほとんどかかなかった子も7%、夢中になって運動することができほとんどなかった子も14%いる。また、算数の問題の解き方をみんなに説明したり、理科の観察を長い期間続けたなどの体験は乏しく、「ほとんどなかった」子が約4割にも達する。(図1-6)



9. 学校に行くのが楽しみでワクワクすることが「しょっちゅうあった」群では、「今までできなかつたことができてうれしかった」「手をあげて発言した」「先生にほめられてうれしかった」など、授業に積極的に取り組み、先生とのふれあいももっている様子がうかがえる。(図1-9)

10. 小学校のときの友だちの数は、半数以上の子どもが「とてもたくさんいた」と答えしており、「わりといいた」までを合わせると95%をこえる。そして、中学生になっても9割程度は、小学校時代の友だちとつきあっていいる。(図1-10)



11. 友だちとのいやな体験として、「いじめ」「仲間はずれ」「けんか」が「何度もあった」と心に傷を受けるような体験をしている子もそれぞれの項目で1割近くいる。友だちをいじめたことのある子は6割をこえ、仲間はずれにされたこと、なぐりあいのけんかも5割の子が体験している。(図1-13)



12. 先生と一緒に遊んだことのない子が5割。教師との接触の中で一番多くあるのが「しかられた体験」で、「しょっちゅうあった」子が約2割。担任の先生に会いたくないという子が約3割で、ふれあいの少ない男子に多くみられる。(図1-15、1-17、1-18)

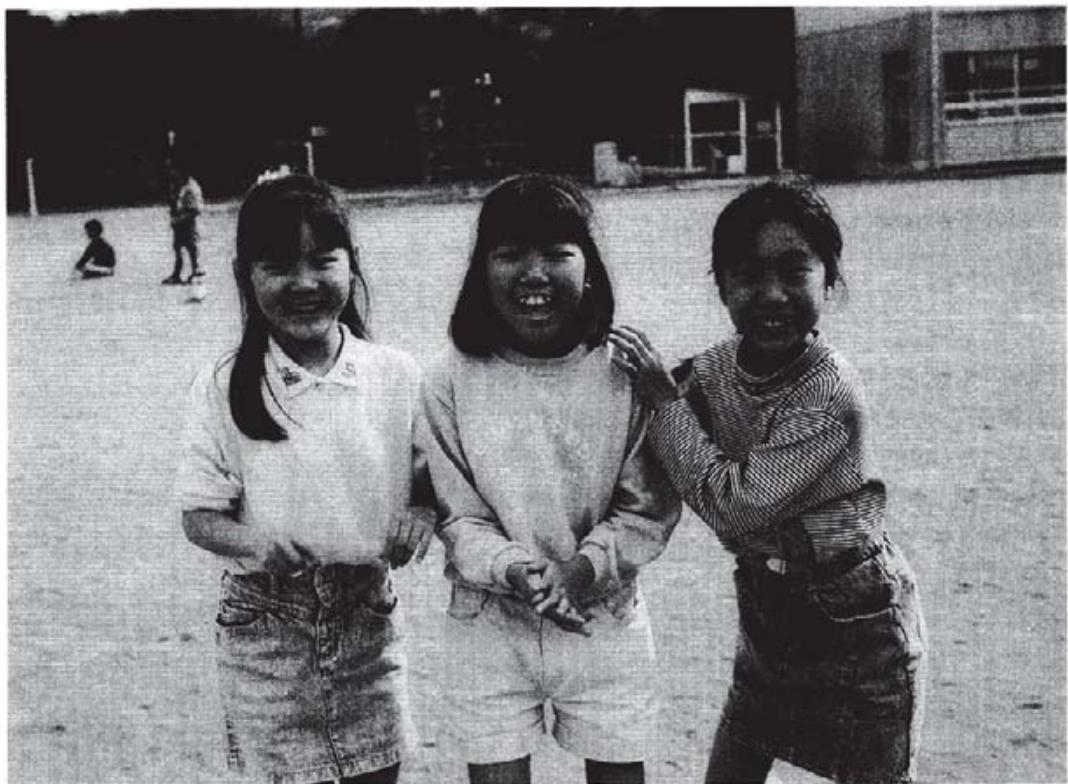


13. 子どもたちが学校の勉強を通して身につけるものは知識や技能であり、応用力をつけたり、子どもの力を引き上げるまでには達していない。(図1-19)

14. 学校生活全体からは、友だちとの出会いや粘り強さが身についた割合が高く、「家庭学習」や「勉強しようという気持ち」など、主体的に勉強に向かわせることはできにくい。(図1-20)

15. 自己像の高い子は、教師からほめられた体験が多く、逆に低い子は、ほめられた体験が最も少ない。小学校教育のねらいは、子どもたちに明るい自己像をもたせ、自らの力で未来を切り開いていったり、困難を乗り越えていけるような強い力を育てることにあるだろう。

# 1. 学校はどんなところだったか



子どもたちの小学校生活を振り返り、子どもたちにとって学校はどんなところだったのか、何を与えてくれたのか。ここでは勉強以

外の学校生活全体を「学校の楽しさ」を中心に追ってみたい。

## ●学校の楽しさ))

表1-1は小学校の生活の楽しさをたずねたものである。「とても楽しかった」と答えた子は49%、「わりと」を合わせると約9割弱の子どもたちが学校生活が楽しかったと思っている。性別では女子のほうが、やや学校生活を楽しんでいる様子がうかがえる。

表1-2は、学校に行くときの気持ちについて「学校に行くのが楽しみでワクワクしたこと」「学校に行きたくなかったこと」が、どのくらいあったかとたずねたものである。まず、学校に行くのが楽しみでワクワクした体

験が「ショッちゅうあった」割合は22%、「わりと」を合わせると約5割。一方、学校に行きたくなかった体験が「ショッちゅうあった」子は12%、「わりと」を合わせると約2割強。「ほとんどなかった」子は39%にすぎず、学校に行きたくなかった体験をもつ子の多さが気になる結果である。

表1-3は学業成績との関連を示したものである。成績の上位群では「とても・わりと楽しかった」と答えた子は91%、下位群では77%と成績の良し悪しが学校生活の楽しさに

及ぼす影響は大きい。表1-4に示したように、学校に行くのが楽しみでワクワクした体験は成績上位群に多く、学校に行きたくなかった体験

は成績下位群に多い。これからも子どもたちの学校生活の楽しさを規定する要因として、学業成績の占める割合が大きいことがうかがえる。

表1-1 小学校生活は楽しかったか

	とても 楽しかった	わりと 楽しかった	あまり 楽しくなかった	ぜんぜん 楽しくなかった	(%)
全 体	48.9 86.5	37.6	8.7	4.8	
男 子	40.8	42.1	10.3	6.8	
女 子	56.9	33.1	7.2	2.8	

表1-2 学校に行くときの気持ち

		しょっちゅう あった	わりとあった	たまにあった	ほとんど なかった	(%)
1. 学校に行くのが 楽しみでワクワクしたこと	全体	22.1	28.1	31.9	17.9	
	男子	15.9	25.0	36.1	23.0	
	女子	28.2	31.1	28.0	12.7	
2. 学校に行きたく なかったこと	全体	11.7	12.7	36.6	39.0	
	男子	13.5	12.7	35.7	38.1	
	女子	9.9	12.6	37.4	40.1	

表1-3 小学校生活は楽しかったか × 成績

(%)

	上	中	下
とても楽しかった	53.6	51.0	39.2
わりと楽しかった	37.5	38.0	37.8
あまり 楽しくなかった	5.5	8.3	13.3
ぜんぜん 楽しくなかった	3.4	2.7	9.7

表1-4 学校に行くときの気持ち × 成績

(%)

	学校に行くのが楽しみで ワクワクしたこと			学校に行きたくなかったこと		
	上	中	下	上	中	下
しょっちゅうあった	(31.5)	21.5	12.9	7.9	10.3	(18.9)
わりとあった	27.4	31.8	22.7	11.9	12.4	14.4
たまにあった	26.6	32.5	36.9	36.0	37.0	35.7
ほとんどなかった	14.5	14.2	(27.5)	(44.2)	40.3	31.0

## ●一日の生活の中で))

さて、小学校時代を振り返って、一日の学校生活の中で心に一番残っているのは何であろうか。ここでは、朝、学校に行く前から放課後の生活まで、子どもたちの心に残っている活動を探ってみることとした。

表1-5は、一日の生活の中から、朝、学校に行く前・朝の会・授業中・休み時間・給食・朝会や集会・掃除・クラブ活動・放課後・学級会の10項目について覚えているかを、

たずねてみたものである。子どもたちが「とても覚えている」としたのは、クラブ活動(49%)、休み時間(40%)、放課後(38%)で、人間的なふれあいの深い出来事が記憶に残っているようである。逆に、朝会や集会(18%)、朝の会(20%)、学級会(20%)など、全体で行うような行事での記憶は薄いようである。

図1-1は、性別で示した。全ての項目で

やや女子のほうが覚えている割合が高い。特に放課後を「とても覚えている」割合は女子45%、男子31%と、差が顕著にみられる。

表1-6は、学校に行くときの気持ちとの関連を示したものである。学校に行くのが楽しみでワクワクした体験が「ショッちゅうあった」群と「ほとんどなかった」群の比較

である。まず、一日の生活を「とても・かなり覚えている」割合の平均値をみると、ワクワクした体験が「ショッちゅうあった」群では69%、「ほとんどなかった」群では39%と、学校に行くのが楽しみでワクワクしている子どもたちは、中学生になっても小学校の頃の出来事を鮮明に覚えているようである。

表1-5 一日の生活の中での出来事

	(%)				
	とても 覚えている	かなり 覚えている	少し 覚えている	あまり覚えて いない	ぜんぜん覚え ていない
1. 朝、学校に行く前	29.8	28.4	25.7	10.7	5.4
2. 朝の会	19.5	23.4	30.5	16.9	9.7
3. 授業中	26.1	27.3	29.1	11.7	5.8
4. 休み時間	②40.2	26.7	20.2	8.7	4.2
5. 給食	33.6	23.2	24.7	12.8	5.7
6. 朝会や集会	18.2	21.0	30.9	18.4	11.5
7. 掃除	23.2	20.2	26.2	19.6	10.8
8. クラブ活動	①49.4	27.5	15.3	4.1	3.7
9. 放課後	③37.9	20.4	22.2	11.1	8.4
10. 学級会	20.0	18.8	26.7	20.8	13.7

図1-1 一日の生活の中での出来事 × 性別

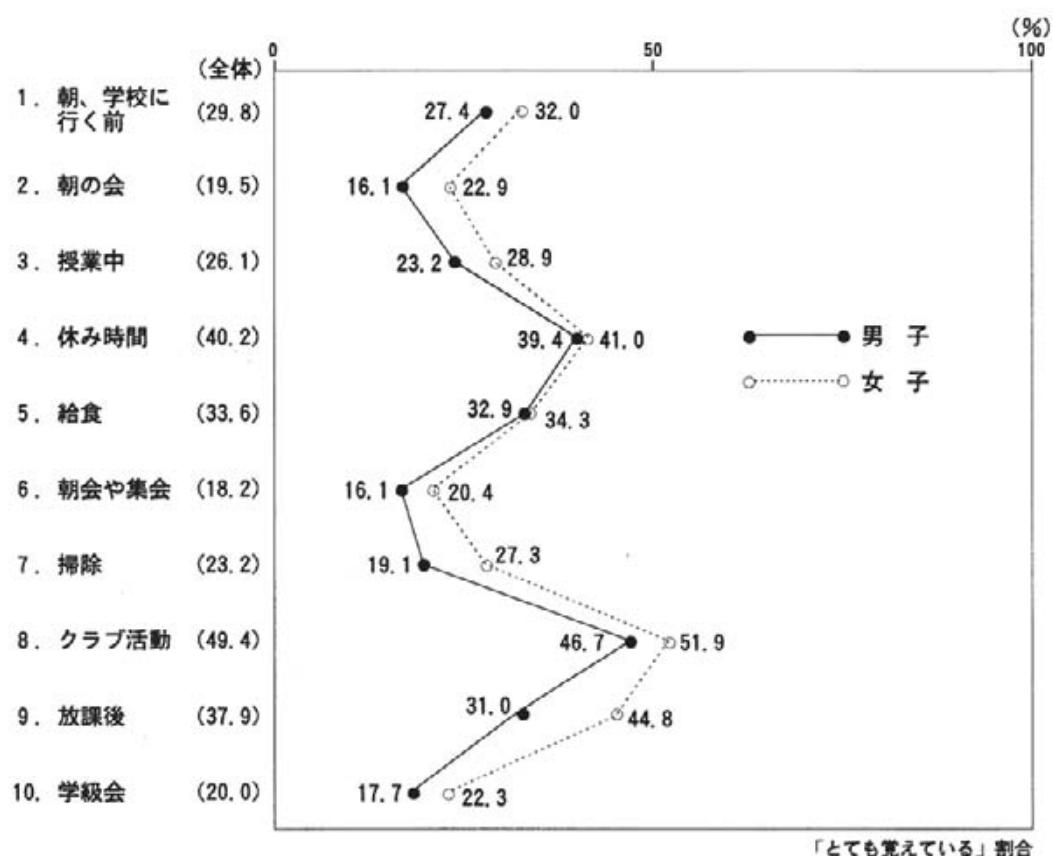


表1-6 一日の生活の中での出来事 × 学校に行くのが楽しみで  
ワクワクしたこと

	(%)	
	しょっちゅう あった群	ほとんど なかった群
1. 朝、学校に行く前	69.9	41.5
2. 朝の会	56.6	28.8
3. 授業中	73.7	39.4
4. 休み時間	83.4	48.6
5. 給食	75.4	38.8
6. 朝会や集会	53.8	27.2
7. 掃除	58.8	32.4
8. クラブ活動	84.9	60.6
9. 放課後	76.1	40.5
10. 学級会	54.7	28.9
平均 値	68.7	38.7

「とても」+「かなり」覚えている割合

## ●行事の楽しさ))

学校生活の中では教科の学習以外に遠足、修学旅行、運動会、音楽会など、さまざまな行事が計画され実践されている。こうした学校行事への参加を子どもたちはどのように受けとめているのだろうか。ここでは「行事の楽しさ」を中心に、子どもたちの行事に対する積極さや態度をみていきたい。

表1-7は、遠足・修学旅行などの校外行事、運動会・水泳大会・マラソン大会などのスポーツ的行事、学芸会や音楽会など文化的行事、全体集会や卒業式など儀式に関する行事、労働意欲や奉仕活動としての大掃除について、「楽しさ」をたずねたものである。「とても楽しかった」行事は修学旅行で74%、

表1-7 行事の楽しさ

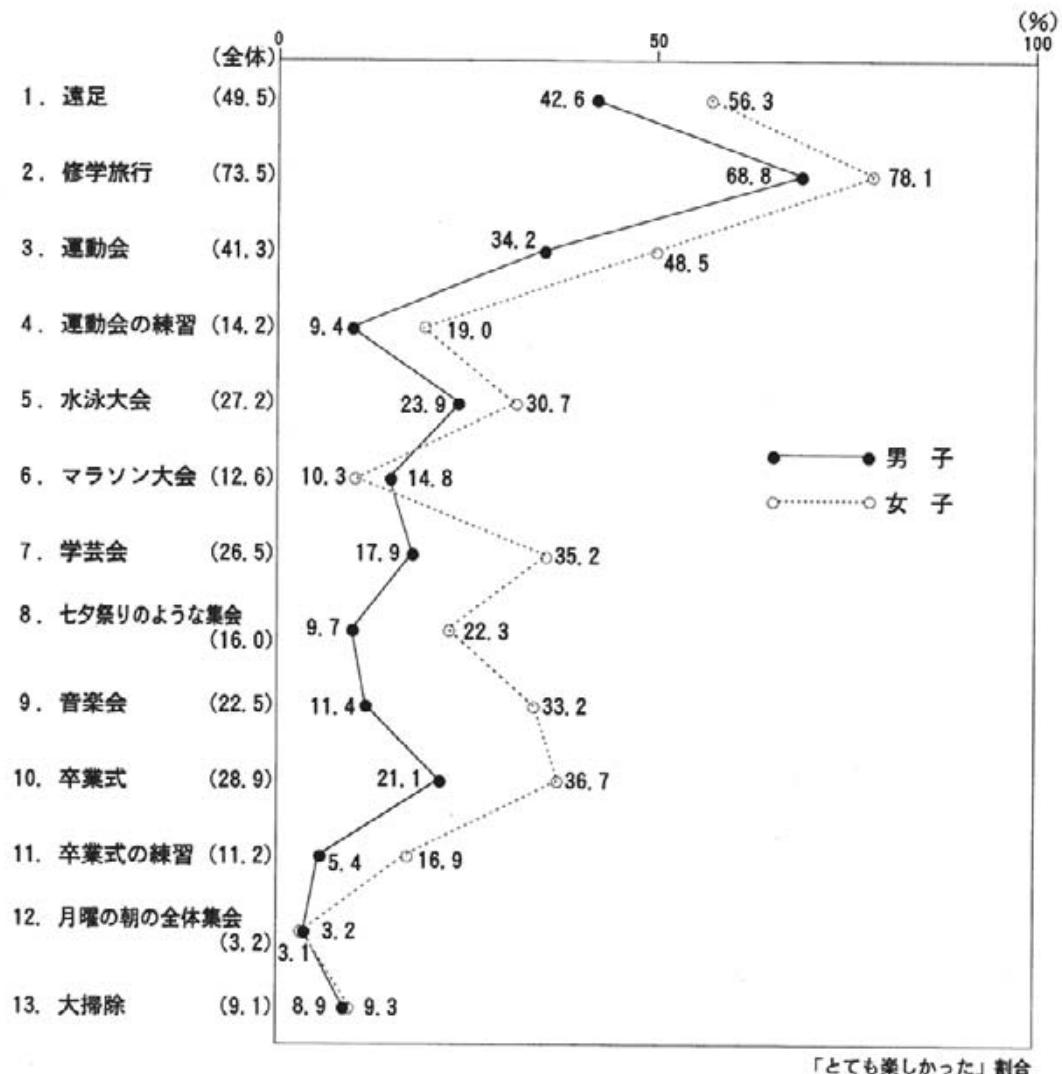
(%)

	とても 楽しかった	かなり 楽しかった	やや 楽しかった	あまり 楽しく なかった	ぜんぜん 楽しく なかった
1. 遠足	②49.5	24.6	17.9	5.2	2.8
2. 修学旅行	①73.5	12.8	7.4	3.2	3.1
3. 運動会	③41.3	23.7	22.0	8.8	4.2
4. 運動会の練習	14.2	17.7	25.9	25.0	17.2
5. 水泳大会	27.2	18.6	23.8	16.4	14.0
6. マラソン大会	12.6	12.2	23.7	24.3	27.2
7. 学芸会	26.5	23.6	27.4	12.5	10.0
8. 七夕祭りのような集会	16.0	18.7	27.6	22.9	14.8
9. 音楽会	22.5	19.5	26.8	18.9	12.3
10. 卒業式	28.9	13.2	19.8	18.4	19.7
11. 卒業式の練習	11.2	12.0	17.6	26.3	③32.9
12. 月曜の朝の全体集会	3.2	6.1	13.9	35.5	①41.3
13. 大掃除	9.1	9.4	20.8	25.9	②34.8

「かなり」を含めると約9割の子どもたちが修学旅行を楽しい行事として受けとめている。子どもたちにとっては家庭(親)から離れ、知らない土地で友だちと宿泊する修学旅行は、未知への憧れと不安、友だちや先生との人間的な深いふれあいの中で胸ときめくような楽しい行事になっているのではないだろうか。次いで遠足(50%)、運動会(41%)が楽しい行事のベスト3であり、子どもたちが校外やグラウンドで生き生きと活動している姿が想像できよう。

逆に、「ぜんぜん楽しくなかった」ベスト3をみると、月曜の朝の全体集会(41%)、大掃除(35%)、卒業式の練習(33%)である。子どもたちにとって、修学旅行や遠足、運動会は、いつもの教科の授業と違い、自然の中で新たな発見をしたり、友だち関係を深めたり、グラウンドで一生懸命競技し、応援するという子ども自身の主体的活動である。したがって、こうした主体的活動が行事への関心を高め、楽しさにつながるのであろう。図1-2は、性別を示した。

図1-2 行事の楽しさ × 性別



もう少し数値を追ってみたい。学校に行くときの気持ちとの関係をみたのが表1-8である。まず、遠足から大掃除まで「とても・かなり楽しかった」平均値をみると、学校に行くのが楽しみでワクワクした体験が「ショッちゅうあった」群では56%、「ほとん

どなかった」群では26%と、ワクワクした体験が多いほど、学校行事に積極的で、学校行事が楽しいものになっていることが考えられる。また、こうした学校行事が楽しいので、学校に行くのがいっそう楽しくなっているとも想像できる。

表1-8 行事の楽しさ × 学校に行くのが楽しみでワクワクしたこと

	(%)	
	しょっちゅう あった群	ほとんど なかった群
1. 遠足	88.1	51.1
2. 修学旅行	93.9	68.2
3. 運動会	81.9	35.9
4. 運動会の練習	49.9	15.6
5. 水泳大会	63.4	29.0
6. マラソン大会	27.6	15.0
7. 学芸会	68.7	31.2
8. 七夕祭りのような集会	52.2	15.0
9. 音楽会	60.2	23.1
10. 卒業式	60.7	24.6
11. 卒業式の練習	39.8	10.7
12. 月曜の朝の全体集会	19.1	3.7
13. 大掃除	26.6	12.9
平均 値	56.3	25.8

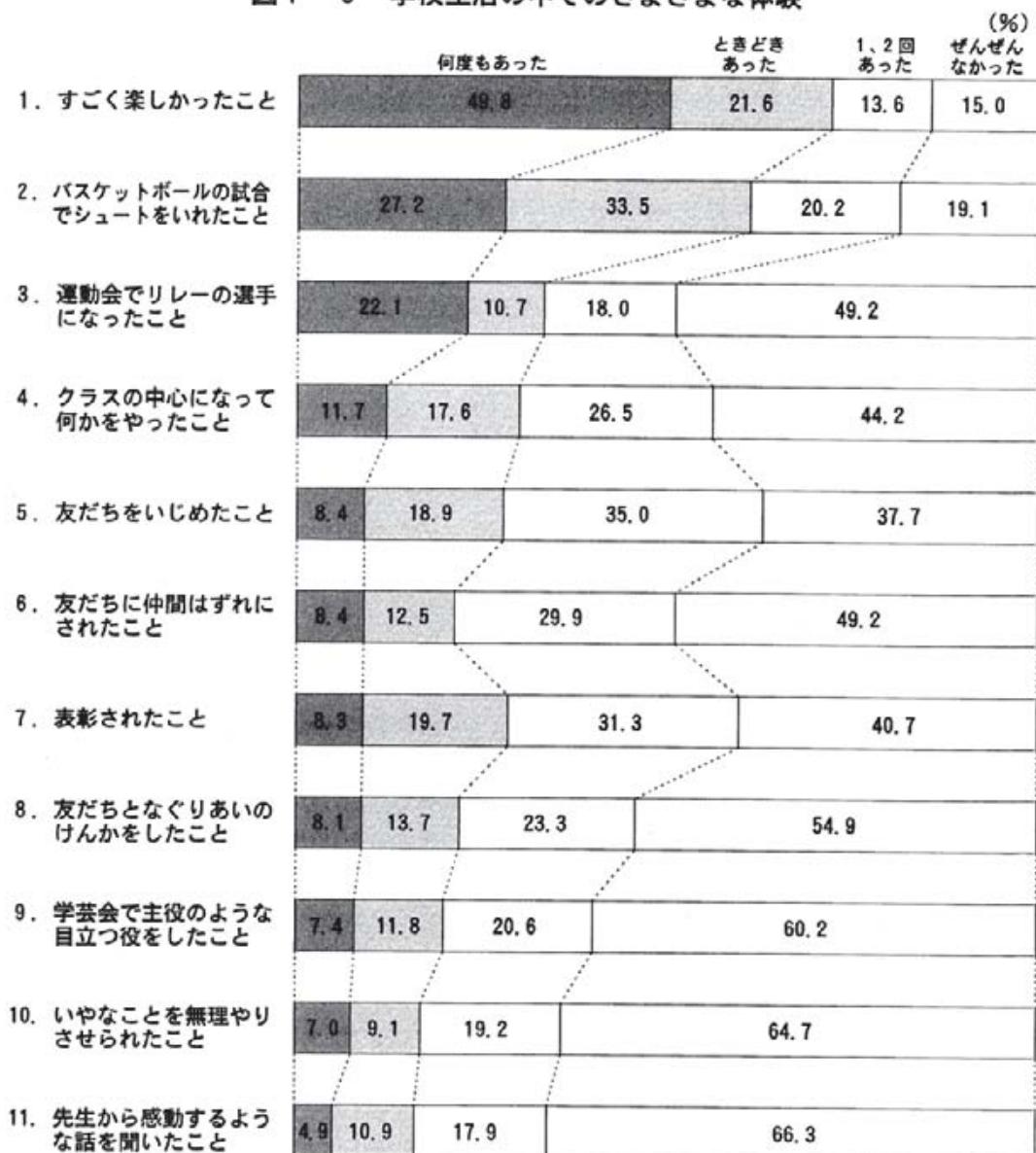
「とても」+「かなり」楽しかった割合

## ●楽しかったこと、つらかったこと))

これまで学校生活の中で忘れない出来事や、行事の楽しさなどの数値を追ってみてきたが、もう少し子どもたちのふだんの生活をみてみると、学校生活の中で図1-3に

示したようにさまざまな体験をしている様子がわかる。まず、楽しかった体験からくわしくみていきたい。表1-9は、「すごく楽しかったこと」があったかたずねたものである。

図1-3 学校生活の中でのさまざまな体験



「何度もあった」子は50%、「ときどき」を含むと約7割の子どもたちが、すごく楽しかったことがあったと答えている。そこで、楽しかったこと、つらかったことの内面にせまるため、子どもたちに自由に記述してもらった。その内容をまとめると、

〈すごく楽しかったこと〉

- |                          |        |
|--------------------------|--------|
| 1位 校外行事 232(男子54、女子178)  |        |
| ・修学旅行                    | ・移動教室  |
| ・臨海教室                    | ・林間学校  |
| ・遠足など                    |        |
| 2位 休み時間や放課後に友だちと仲よく遊んだこと |        |
| 162(男子61、女子101)          |        |
| 3位 学級、学年行事 42(男子7、女子35)  |        |
| ・学年スポーツ大会                |        |
| ・バスケットボールやドッジボールなどのクラス対抗 |        |
| ・お楽しみ会                   |        |
| ・クリスマス会など                |        |
| 4位 運動会 29(男子9、女子20)      |        |
| 5位 体育の授業 26(男子17、女子9)    |        |
| ・バスケットボール                | ・サッカー  |
| ・マラソン                    | ・プールなど |

(複数回答は内容に分け、1件ずつ数えた)

さらに、具体的な記述例を示すと、

- ・家からいろいろなものを持ってきて遊んでよかったこと
- ・休み時間に全員でドッジボールしたこと
- ・休み時間に男女で仲よく遊んだこと
- ・先生が恐い話をしてくれたこと
- ・卒業式の前2週間くらい、席を自由に毎日取り替えたこと
- ・運動会の練習で疲れたとき、授業を1時間つぶして、みんなで寝たこと
- ・先生にほめられたこと

子どもたちの記述には、友だちと仲よく遊ぶこと、特に男女またはクラス全員で仲よく

遊びたいという友だち関係のふれあいを強く求めるもの多かった。

次に、つらかったこととして「いやなことを無理やりさせられた体験」では、表1-10が示すように、「何度もあった」子は7%、「ときどき」を含めると約2割弱である。自由記述の内容をまとめると、

〈いやなことを無理やりさせられたこと〉

- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| 1位 委員会の役員や委員長、係の仕事など | 61(男子19、女子42) |
| 2位 友だちとの人間関係         |               |
| 47(男子15、女子32)        |               |
| 3位 掃除、清掃活動           |               |
| 43(男子13、女子30)        |               |
| 4位 先生との人間関係          |               |
| 20(男子4、女子16)         |               |
| 5位 授業に関して            | 16(男子10、女子6)  |

(複数回答は内容に分け、1件ずつ数えた)

さらに、具体的な記述例を示すと、

- ・司会をさせられた
- ・たいして活動もなく、ほとんど先生が決め、意見も無視される肩書きだけの代表委員になったこと
- ・「あいつの悪口を言ってこい」と言わされた
- ・あやまるときに土下座させられた
- ・みんなの掃除や宿題をおしつけられた
- ・運動会の体操の係がめんどうくさいのに、しかも台の上で体操をやらされた
- ・係で共同作品を作るとき、一番いやなところをさせられた
- ・先生の仕事を頼まれた
- ・クラスの嫌われ者と無理やりくっつけられた。仲よくしろと

係の仕事や掃除などが、無理やりさせられたつらかった体験であるとは、なんとも寂しい気がする。また、友だちや教師との人間関係のむずかしさがうかがえる。

表1-9 すごく楽しかったこと

	(%)			
	何度も あった	ときどき あった	1、2回 あった	ぜんぜん なかった
全 体	49.8	21.6	13.6	15.0
男 子	41.3	22.6	13.7	22.4
女 子	58.3	20.6	13.5	7.6

表1-10 いやなことを無理やりさせられたこと

	(%)			
	何度も あった	ときどき あった	1、2回 あった	ぜんぜん なかった
全 体	7.0	9.1	19.2	64.7
男 子	8.1	9.1	16.8	66.0
女 子	5.8	9.2	21.6	63.4

## 2. 授業中の体験



この章では、学校生活の中心である授業の楽しさ、教科の好き嫌いや授業中どんな体験をしているのか明らかにしていきたい。

### ●授業中の楽しさ))

まず、表1-11によれば、小学校の勉強が「とても楽しかった」割合は13%、「わりと」を合わせると約6割、女子のほうがやや楽しかった割合が高い。表1-12は、成績との関係を示した。成績の上位群は「とても・わり

と」楽しかったと答えた子が73%、下位群では44%と、1章でみた学校生活以上に成績の良し悪しは、授業中の楽しさを規定する要因となっている。

表1-11 小学校の勉強は楽しかったか

	(%)			
	とても 楽しかった	わりと 楽しかった	あまり樂しく なかった	ぜんぜん樂し くなかった
全 体	13.0 62.2	49.2	27.2	10.6
男 子	10.4	46.5	29.1	14.0
女 子	15.5	52.0	25.3	7.2

表1-12 勉強の楽しさ × 成績

	上	中	下	(%)
とても楽しかった	22.5	11.6	4.4	
わりと楽しかった	50.3	55.1	39.4	43.8
あまり樂しくなかった	18.9	26.9	37.0	
ぜんぜん樂しくなかった	8.3	6.4	19.2	

## ●教科の好き嫌い))

図1-4は、小学校時代の教科の好き嫌いを示したものである。体育が最も好きな教科で、「とても好きだった」と答えた子は51%、「わりと」を合わせると約8割の子どもたちが好きな教科だったとしている。次いで図画工作、音楽などの芸術教科が好きな教科であった。国語や算数、社会や理科が「とても好きだった」数値は低く、それらの教科に対する苦手意識をもっていることがうかがえる。表1-13は、性別・成績との関係で示したものである。

小学校の頃から、国語、音楽、家庭科は女

子の好きな教科であり、算数、社会、理科、体育は男子が好きな教科と、教科の好き嫌いに性差が顕著にあらわれている。また、成績の上位群は算数、社会、理科が好きな教科で、下位群との差が大きい。

こうした教科の好き嫌いは、中学生になってからどのように変化してくるのだろうか。

図1-5は、中学生になってからの、国語・数学・英語・体育の4教科の好き嫌いをたずねたものである。国語が「とても好き」な子は14%、数学が21%、英語32%、体育42%と、小学校に比べ数値が高い。調査時期が7

月であるので、まだ中学に入学して日も浅く、子どもたちは希望に燃え、中学生活に励んでいる様子がうかがえる。表は省略したが、国

語は女子が好きな教科で、数学と体育は男子が好きな教科ということは変わらないようである。

図1-4 教科の好き嫌い（小学校の頃）

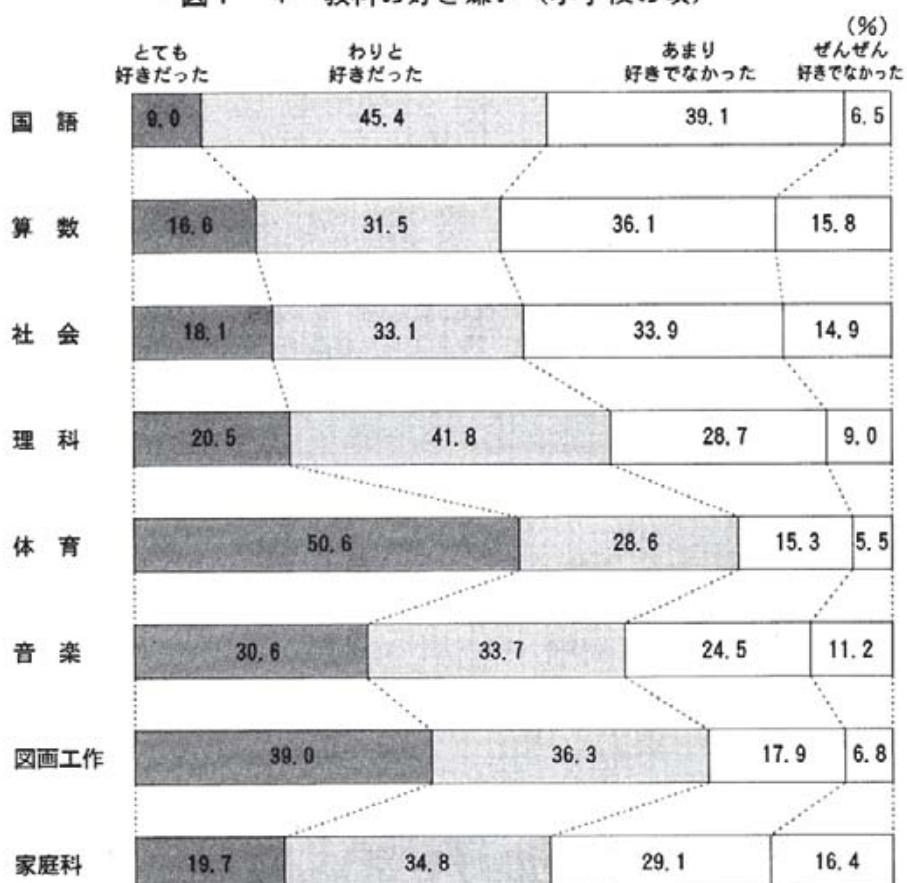


表1-13 教科の好き嫌い × 性別・成績

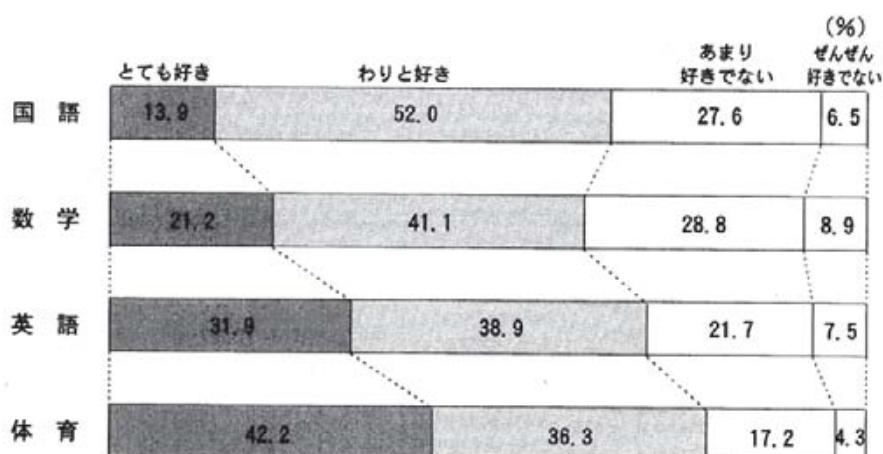
(%)

	性 別		成 績		
	男 子	女 子	上	中	下
1. 国語	44.0	(65.0)	56.0	59.6	44.8
2. 算数	(57.6)	38.7	(68.4)	46.8	28.0
3. 社会	(61.8)	40.5	(59.6)	42.0	40.5
4. 理科	(68.6)	55.9	(69.0)	58.6	60.6
5. 体育	(82.8)	75.4	80.7	80.8	74.5
6. 音楽	44.2	(84.5)	65.5	67.7	57.9
7. 図画工作	75.1	75.3	76.6	76.1	73.9
8. 家庭科	40.6	(68.3)	53.9	(59.6)	48.5

「とても」+「わりと」好きだった割合

□は最大値

図1-5 教科の好き嫌い（中学生になってから）



## ●授業中の体験))

それでは子どもたちは、授業中どんな体験をしているのであろうか。図1-6は各教科に特徴的な体験内容を2つあげ、子どもたちがどのくらい体験しているかたずねたものである。

体育の授業でいっぱい汗をかいだことが「ショッちゅうあった」子は47%、体育の授業が楽しくて夢中になって運動したことは43%、「わりと」を合わせると約7割の子どもが、そうした体験をもっている。また、汗をほとんどかかなかった子も7%、夢中になって運動をすることがほとんどなかった子も14%いる。「社会で調べたことを新聞のようにまとめた」「図工の作品がうまくできて満足した」「音楽の合唱や合奏が楽しくできた」「家庭科の実習が楽しくできた」ということが、「ショッちゅう・わりと」あった子は約5割に達し、子どもたちは満足感や達成感をもって授業に臨んでいることがうかがえる。

しかし、「算数の問題の解き方をみんなに説明した」「理科の観察を長い期間続けてやりとおした」など、みんなの前で発表することや、継続性を体験し身につけていく子の数値は低く、「ほとんどなかった」子が約4割にも達する。ではこうした体験は、子どもたちの学校への意欲とどのような関係があるのだろうか。図1-7によれば、学校に行くのが楽しみでワクワクした体験が「ショッちゅうあった」群は、「ほとんどなかった」群に比べて、全ての項目で高い数値を示している。満足感や達成感、成就感の体験が増えることは、学校に行く楽しみも高まることが想像できる。

表1-14では、成績との関係を示した。成績の上位群の子どもは、授業中、さまざまな体験をしている割合が高いのは当然なのかもしれない。

図1-8は教科の中だけではなく、授業全体の中で、どんな体験をしているかを示したものである。今までできなかつたことができるようになり、うれしかったことが「ショッちゅうあった」子は13%、「わりと」を合わせて約5割。一方、勉強以外のことをして遊んでいたことが「ショッちゅうあった」子は24%、「わりと」を合わせると約5割にも達する。図1-9によれば、学校に行くのが楽しみでワクワクしたことが「ショッちゅうあった」群では、手をあげ発言したこと、今までできなかつたことができるようになり、うれしかったこと、先生にほめられてうれしかったことなど、授業に積極的に取り組み、先生とのふれあいをもっている様子がうかがえる。表1-15は、成績との関係である。

表1-16によれば、算数の問題を黒板に書いたこと、テストで100点をとったこと、授業中、答えがわからず不安だったことの体験では「ショッちゅうあった」子は約1割、「わりと」を合わせても5割にも達しない。その一方で、カンニングの体験が「ショッちゅうあった」と答えた子が4%もいる。

これまでみてきたように、子どもたちの約9割は学校が楽しかったと思っている。そして、女子のほうが学校生活や行事に積極的で、学校生活を楽しんでいるようである。また、学校行事の種類と内容、放課後や休み時間の出来事、友だちや先生とのふれあい、学業成績などをみてきたが、成績上位群は学校での体験が豊かで充実した生活を送っているようである。逆に、成績下位群は学校での体験が乏しく、成績の良し悪しが子どもたちの学校体験や学校の楽しさに及ぼす影響の大きさを感じた。

友だちや教師とのふれあいについては、3章でくわしくみていきたい。

図1-6 教科の中での体験



図1-7 教科の中での体験 × 学校に行くのが楽しみでワクワクしたこと

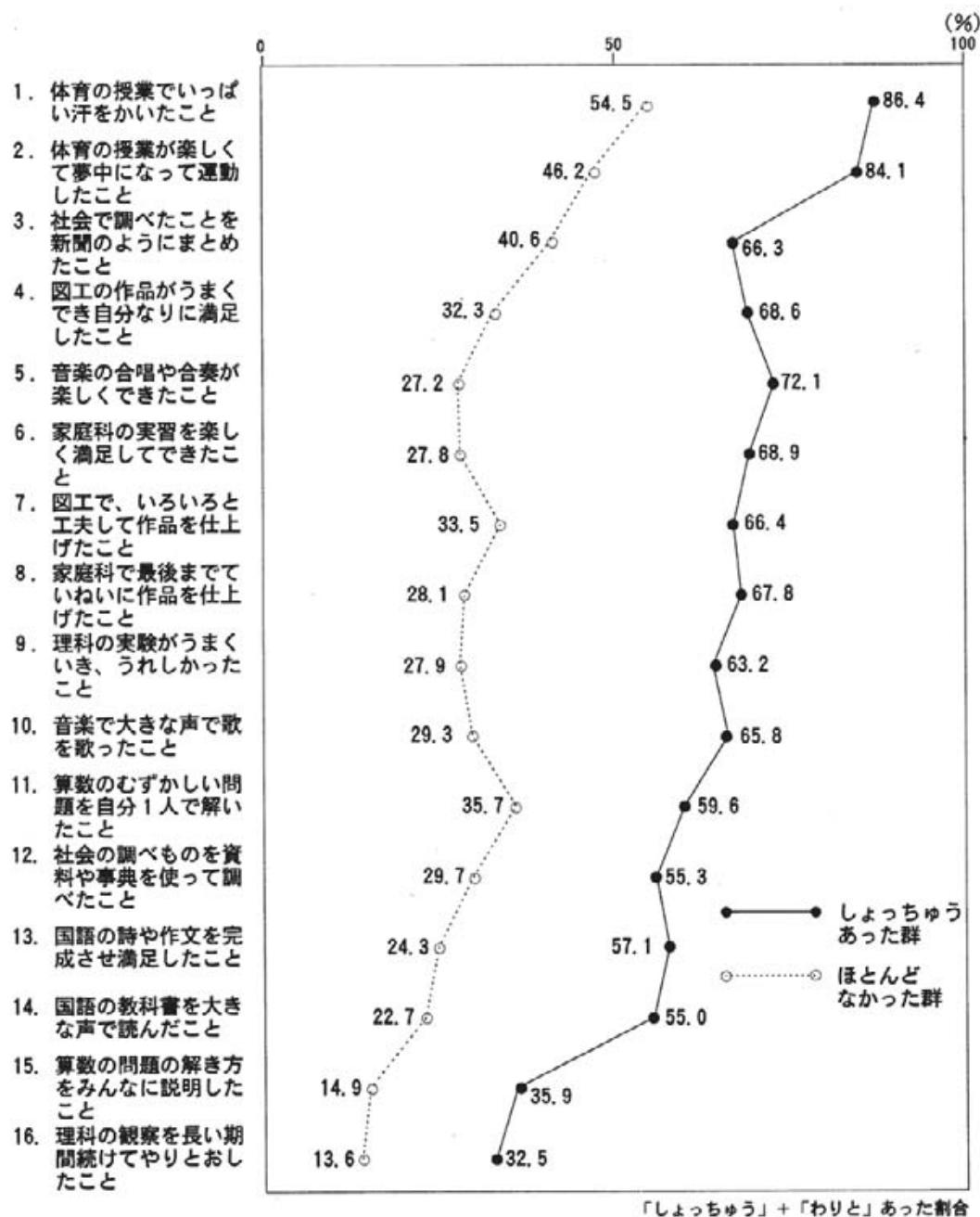


表1-14 教科の中での体験 × 成績

(%)

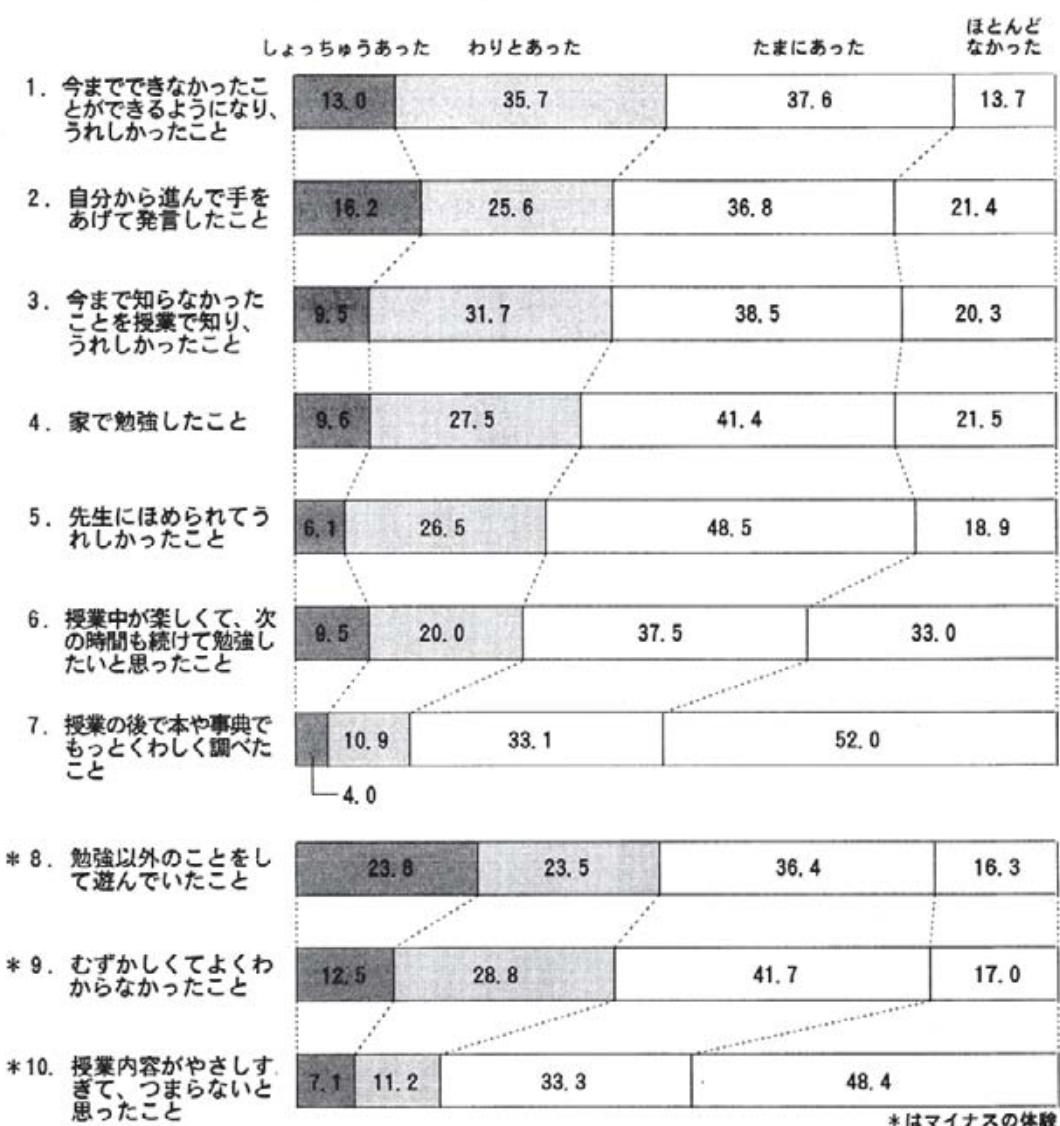
	上	中	下
1. 体育の授業でいっぱい汗をかいしたこと	(81.3)	75.7	67.6
2. 体育の授業が楽しくて夢中になつて運動したこと	(72.6)	62.2	56.9
3. 社会で調べたことを新聞のようにまとめたこと	(66.9)	59.7	37.7
4. 図工の作品がうまくでき自分なりに満足したこと	(60.8)	54.1	44.0
5. 音楽の合唱や合奏が楽しくできしたこと	57.6	56.3	41.4
6. 家庭科の実習を楽しく満足してできたこと	(58.9)	53.6	38.6
7. 図工で、いろいろと工夫して作品を仕上げたこと	(59.1)	49.2	41.4
8. 家庭科で最後までていねいに作品を仕上げたこと	(56.9)	51.4	39.4
9. 理科の実験がうまくいき、うれしかったこと	(58.7)	47.2	40.3
10. 音楽で大きな声で歌を歌ったこと	55.7	51.9	33.2
11. 算数のむずかしい問題を自分で解いたこと	(70.1)	45.0	24.1
12. 社会の調べものを資料や事典を使って調べたこと	(60.1)	44.7	31.5
13. 国語の詩や作文を完成させ満足したこと	(50.2)	44.1	33.8
14. 国語の教科書を大きな声で読んだこと	(51.6)	37.7	23.7
15. 算数の問題の解き方をみんなに説明したこと	(44.8)	19.0	8.2
16. 理科の観察を長い期間続けてやりとおしたこと	25.8	22.8	17.0

「しおり」と「わざと」あった割合

□は最大値 ~~~は最小値

図1-8 授業全体の中での体験(1)

(%)



\*はマイナスの体験

図1-9 授業全体の中での体験(1) × 学校に行くのが楽しみでワクワクしたこと

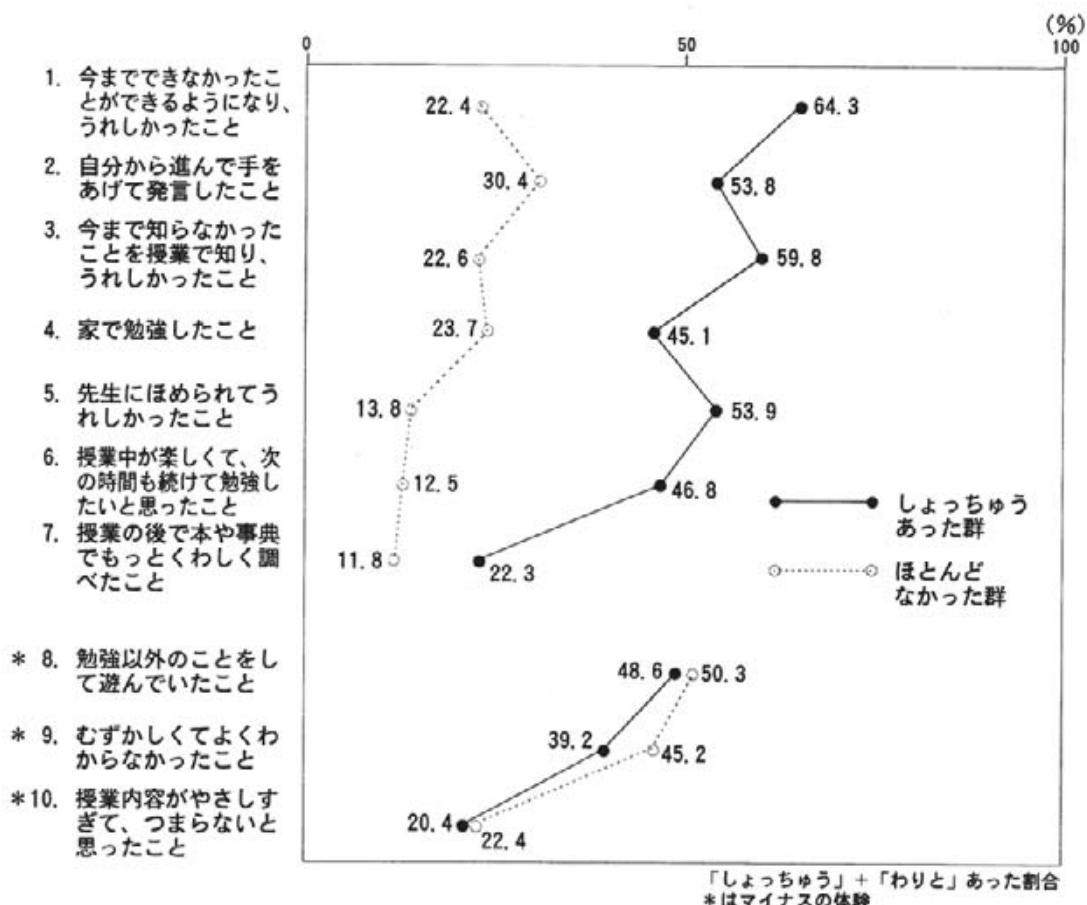


表1-15 授業全体の中での体験(1) × 成績

(%)

	上	中	下
1. 今までできなかつたことができるようになり、うれしかつたこと	53.8	52.0	<u>39.3</u>
2. 自分から進んで手をあげて発言したこと	(65.7)	36.1	<u>22.6</u>
3. 今まで知らなかつたことを授業で知り、うれしかつたこと	(46.6)	33.2	<u>33.8</u>
4. 家で勉強したこと	44.4	39.6	<u>25.8</u>
5. 先生にほめられてうれしかつたこと	(53.5)	28.7	<u>15.1</u>
6. 授業中が楽しくて、次の時間も続けて勉強したいと思ったこと	(38.7)	30.1	<u>18.1</u>
7. 授業の後で本や事典でもっとくわしく調べたこと	(22.4)	13.8	<u>8.7</u>
* 8. 勉強以外のことをして遊んでいたこと	41.8	45.9	(57.4)
* 9. むずかしくてよくわからなかつたこと	<u>24.8</u>	42.2	(58.6)
* 10. 授業内容がやさしすぎて、つまらないと思ったこと	<u>31.4</u>	12.5	12.0

「しおっちゅう」+「わりと」あった割合

\*はマイナスの体験

( ) は最大値 ~~~~は最小値

表1-16 授業全体の中での体験(2)

(%)

	しおっちゅう あつた	わりと あつた	たまに あつた	ほとん どなかつた
1. 算数の問題を黒板に出て書いたこと	14.3	28.2	43.0	14.5
2. テストで100点をとったこと	13.2	32.3	42.9	11.6
3. 授業中、答えがわからず不安だったこと	12.9	20.8	42.9	23.4
4. カンニングをしたこと	4.1	3.5	17.7	74.7

### 3. 友や教師とのふれあいの中で



#### ●友だちとの関係))

まず、子どもたちにどのくらい友だちがいるのかをたずねた結果を図1-10に示した。

(1)は、小学校のときの友だちの数だが、男女とも同様に、多くの友だちをもっている。半数以上の子どもたちが「とてもたくさんいた」と答えており、「わりといた」までを合わせると、男女ともに95%をこえている。そして(2)に示すように、中学生になっても、9割程度は小学校の友だちとも仲よくつきあっている。さらに(3)に、現在の友だちの数を示した。小学校のときの友だち関係をベースとして、新しい関係が生み出されていくのである。子どもたちはたくさんの仲間の中で楽しく生活している様子がうかがえる。

そこで、次の図1-11で、子どもたちに友

だちとの関係を評価してもらった。図が示すように、5割近くの子どもたちは、友だちづきあいが、まあいいほうだと答えている。しかし一方で、3割近い子どもが、あまりよくないとも答えている。

さらに「友だちに親切か」とたずねると、「とてもそう」と答えるのは、わずか2割弱である。多くの友だちをもつというものの、友だち関係にはむずかしさを感じている部分もありそうだ。

そこで小学校時代の友だちとの過ごし方をもう少しく述べてみた。

図1-12は、小学校時代の遊び体験である。もちろん、同じクラスの同性とは、ほとんど毎日遊んでいたであろうから、ここでは異性

と他学年との接触をみていく。図が示すように、他学年と一緒に遊んでいた子が、「わりと」を含めて5割弱。また、男女一緒に遊ぶとなると、約3割となる。一緒に学校にいても、他学年や異性とは接触せずに、同じクラスの同じ友だちとしか遊ばないという子どもたちも、わりと多くみられる。

次の図1-13は、友だちとのい的な体験と

して、「いじめ」「仲間はずれ」「けんか」をみたものである。「何度もあった」と、心に傷を受けるような体験をしている子も、それぞれの項目で1割近くいる。また、友だちをいじめたことのある子は6割をこえ、仲間はずれにされたことは、ほぼ5割の子が体験しているという。なぐりあいのけんかも、5割近くの子が体験している。

図1-10 友だちの存在

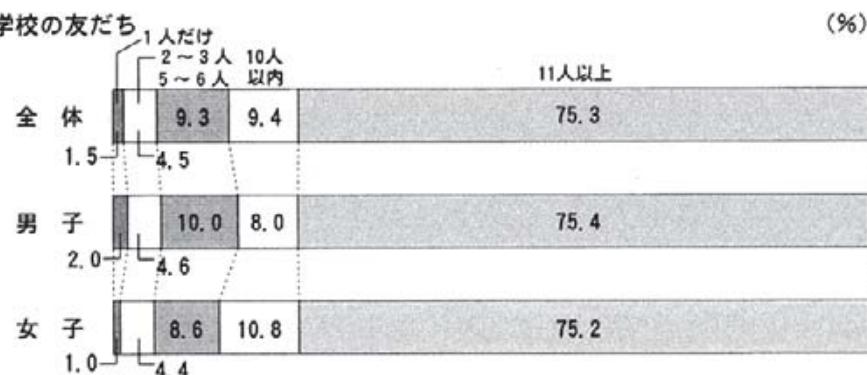
(1) 小学校のときの友だち



(2) 小学校のときの友だちとのつきあい



(3) 中学校の友だち



ここで、これまでの友だちとの体験をまとめる意味で、友だちから受けたうれしい体験といやな体験について、それぞれ3項目ずつたずねてみた。図1-14のグラフの上に並ぶのは、「やさしくされた」「困っているとき、

助けてもらった」「励まされた」と、友だちとの好ましい関係を示すものである。「ときどきあった」までを含めると、約8割の子どもが、そのような体験をしている。

図1-11 友だち関係

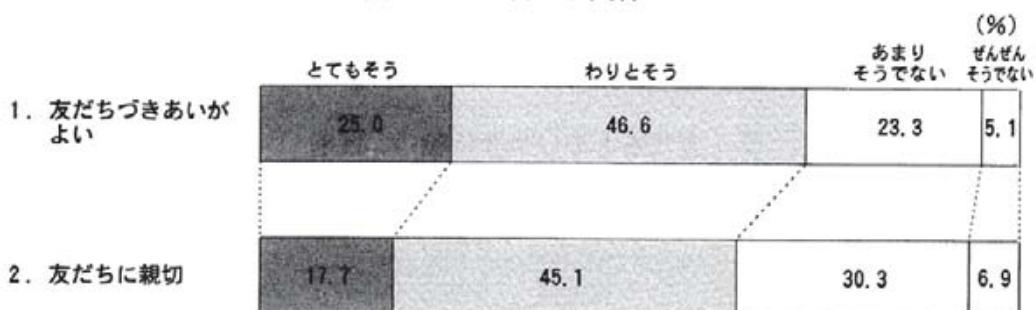
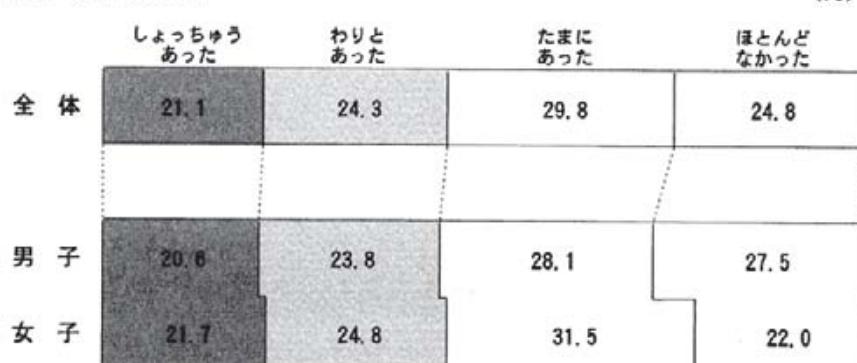


図1-12 友だちとの遊び体験

## (1) 他の学年の人と一緒に遊んだ



## (2) 休み時間、男女一緒に遊んだ

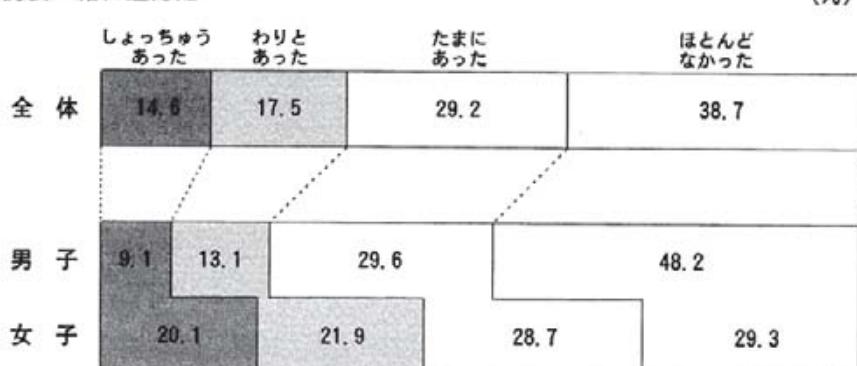


図1-13(1) 友だちとのいやな体験

	何度も あった	ときどき あった	1、2回あった	ぜんぜんなかっ た	(%)
1. 友だちをいじめ たこと	8.4	18.9	35.0	37.7	
2. 仲間はずれにさ れたこと	8.4	12.5	29.9	49.2	
3. なぐりあいのけ んかをしたこと	8.1	13.7	23.3	54.9	

(2) 友だちとのいやな体験 × 性別

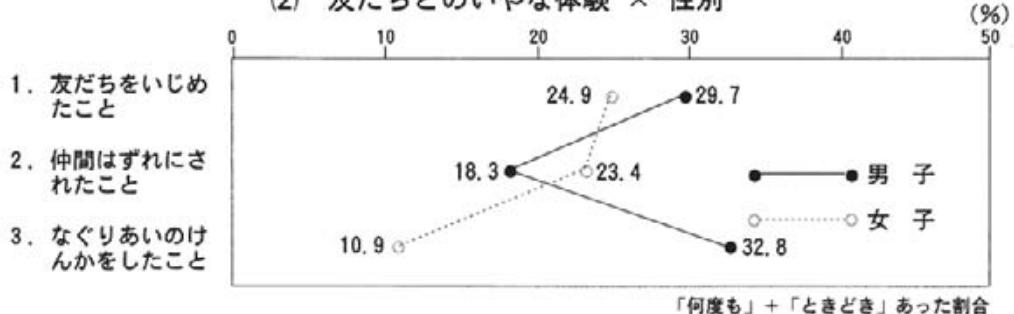


図1-14 友だちとの体験

	しょっちゅう あった	わりとあつた	ときどき あった	あまり なかつた	ぜんぜん なかつた	(%)
1. やさしくされ たこと	24.9	32.1	26.5	9.5	7.0	
2. 困っているとき、助 けてもらつたこと	19.6	30.9	30.1	12.0	7.2	
3. 励まされたこ と	19.7	29.5	29.3	13.6	7.9	
4. バカにされた こと	9.0	9.9	19.3	25.5	36.3	
5. なぐられたこ と	8.2	5.7	12.8	20.0	53.3	
6. いじめられた こと	7.1	6.7	17.0	28.8	40.4	

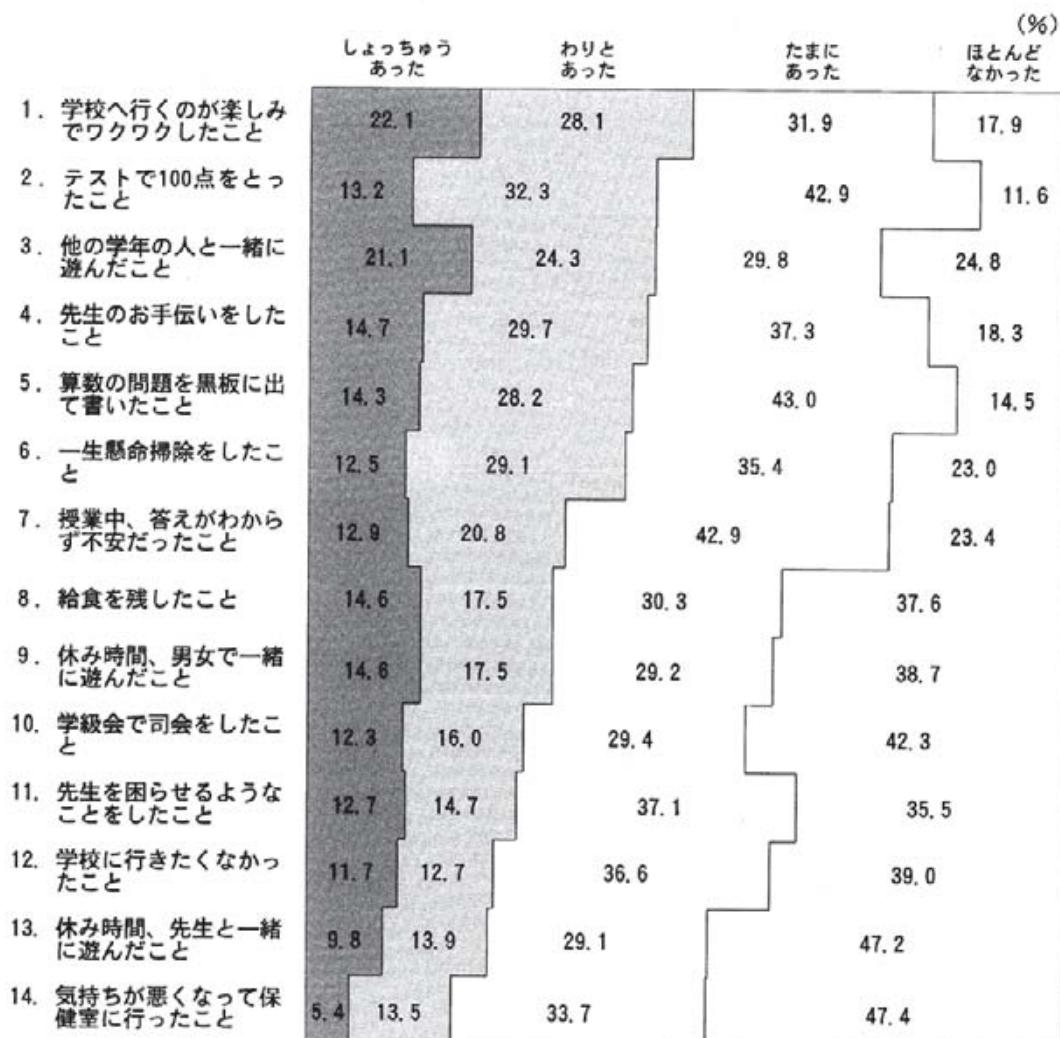
## ●教師とのふれあい))

友だちとのかかわりと同様に、担任の教師との出会いも、子どもたちの成長にとって大きな要因になるものであろう。子どもたちは、先生とどのような接触をもっているのだろうか。

図1-15は、小学校の頃楽しかったことや

つらかったこと、がんばったことなどを、さまざまな場面でたずねたものである。この中で教師とのかかわりをたずねたものは3項目であるが、「先生のお手伝い」が、わりとある程度で、「困らせるようなこと」や、「一緒に遊んだこと」は、あまり行われていない。

図1-15 いろいろな体験



特に、先生と一緒に遊んだことがほとんどない子が5割近くおり、これでは人間的なふれあいは、なかなかできなかったのではないかと予想される。

また、これを性別にみた図1-16からは、特に男子の先生とのふれあいの少なさが読みとれる。

教師とのかかわりを、図1-17でまとめてみてみると、一番多くあるのが、「しかられた体験」である。「ショッちゅうあった」という子が2割いる。一方、ほめられたり、やさしくされたりというのもかなりあり、「と

きどき」までを含めると、7割から8割に達する。子どもたちを注意しなければならない場面はたくさんあるだろうが、しかってもほめるというように、「ショッちゅうしかられる」2割の子が、「ほめられたことのない」2割の子と同じ子どもにならないように、気をつけていく必要があるだろう。

図1-18に示す「担任の先生に会いたくない」という、約3割の子どもたちが気になるところである。そして、その割合は、ふれあいの少ない男子に多くみられる。

図1-16 いろいろな体験 × 性別

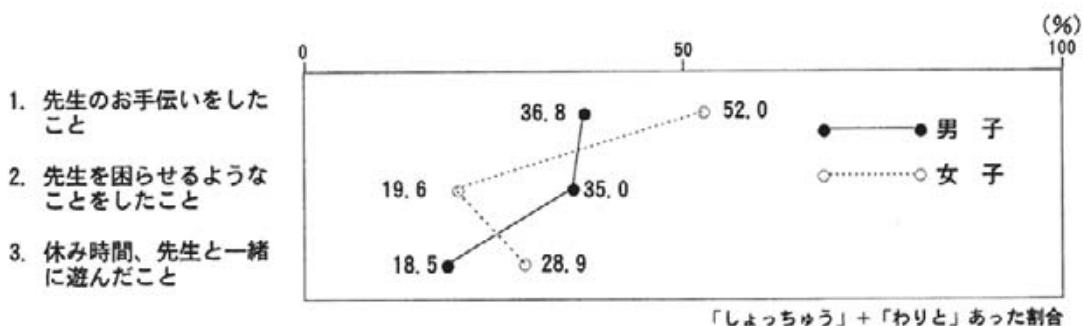


図1-17 教師との体験

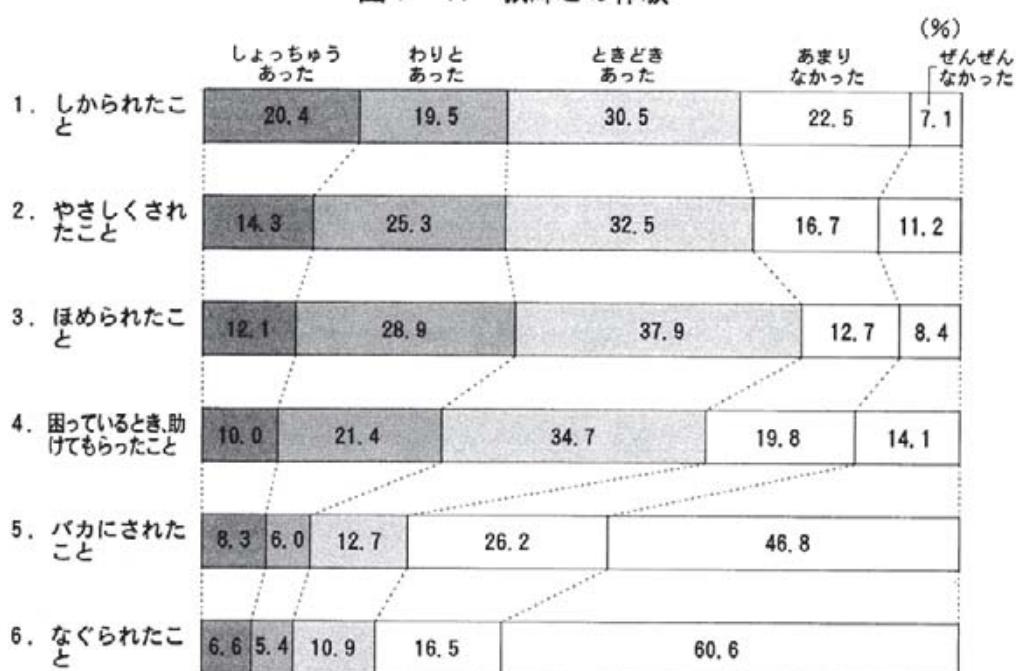
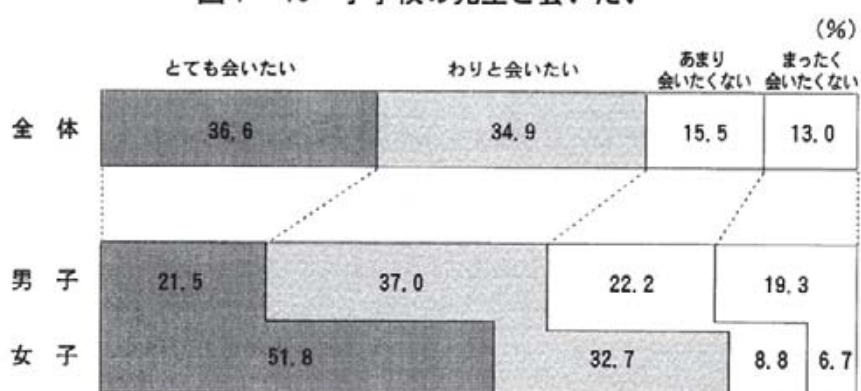


図1-18 小学校の先生と会いたい



## 4. 学校は何を与えてくれたか



これまでみてきたように、子どもたちは授業の中で、また、いろいろな人たちとのかかわりの中で、さまざまなことを体験していた。

それでは、それらを通して、子どもたちはどんなことを学びとったのであろうか。

### ●学校で身につけたこと))

まず、小学校での勉強を通して、子どもたちはどんな力をつけていったのかをみていく。

図1-19は、各教科の学習内容から2つ程度抜き出して、「どの程度できるようになったか」と、その自信のほどをたずねたものである。

「25メートル泳げる」が67%。「さか上がり」で58%。「みそ汁作り」が50%と、5割をこす子どもたちが「とてもできるようになった」と答えている。

また、「新しい友だちとも、すぐ仲よくすることができる」が、「わりと」までを含めると約7割が答えている。

一方、「じゃがいもを育てる」「カシオペア座を見つける」など、教室を離れて実際にできるかというと、その自信はやや低くなっていく。また、「みんなの前で自分の意見を言う」「代表であいさつをする」となると、さらに数値は下がっていく。

全体的に、知識や技能は、多くの子どもた

ちが身につけているものの、応用力をつけたり、その子の力を引き上げるという意味では、もう一步といえる結果であった。

この結果を性別に比較してみたものが、表1-17である。「ランニングシュート」は男子が、「みそ汁」「たて笛」が女子と、それぞれ特徴的な傾向が示されている。また、その他にも「代表でのあいさつ」は女子がやや高く、「むずかしい問題を自分の力で」は、男子のほうがやや高くなっている。

それでは、授業の場面だけでなく、学校生活全体ではどんな力をつけたと思っているのだろうか。図1-20は、「あなたは、学校生活を通してどんなことができるようになったと思うか」たずねてみた結果である。

上から順に、「友だちと遊ぶようになった」

「スポーツが好きになった」「学校が好きになった」と、楽しく過ごした小学校生活のことを、そしてその中で、多くの友だちとの出会いがあったことを、子どもたちは高く評価しているようである。

そして、4番目には、「がまん強くやりとげる力」、続いて「最後までがんばる力」がついたと答えている。

一方、「何でもやろうという気持ち」「自信をもって」という項目は、その下にあり、学校生活からは、自信というより粘り強さを身につける割合のほうが、やや高いようである。

また、「家庭学習」「勉強しようという気持ち」は下位であり、主体的に勉強に向かわせることは、他の項目に比べてできにくいという結果であった。

図1-19 小学校の学習を通してできるようになったこと

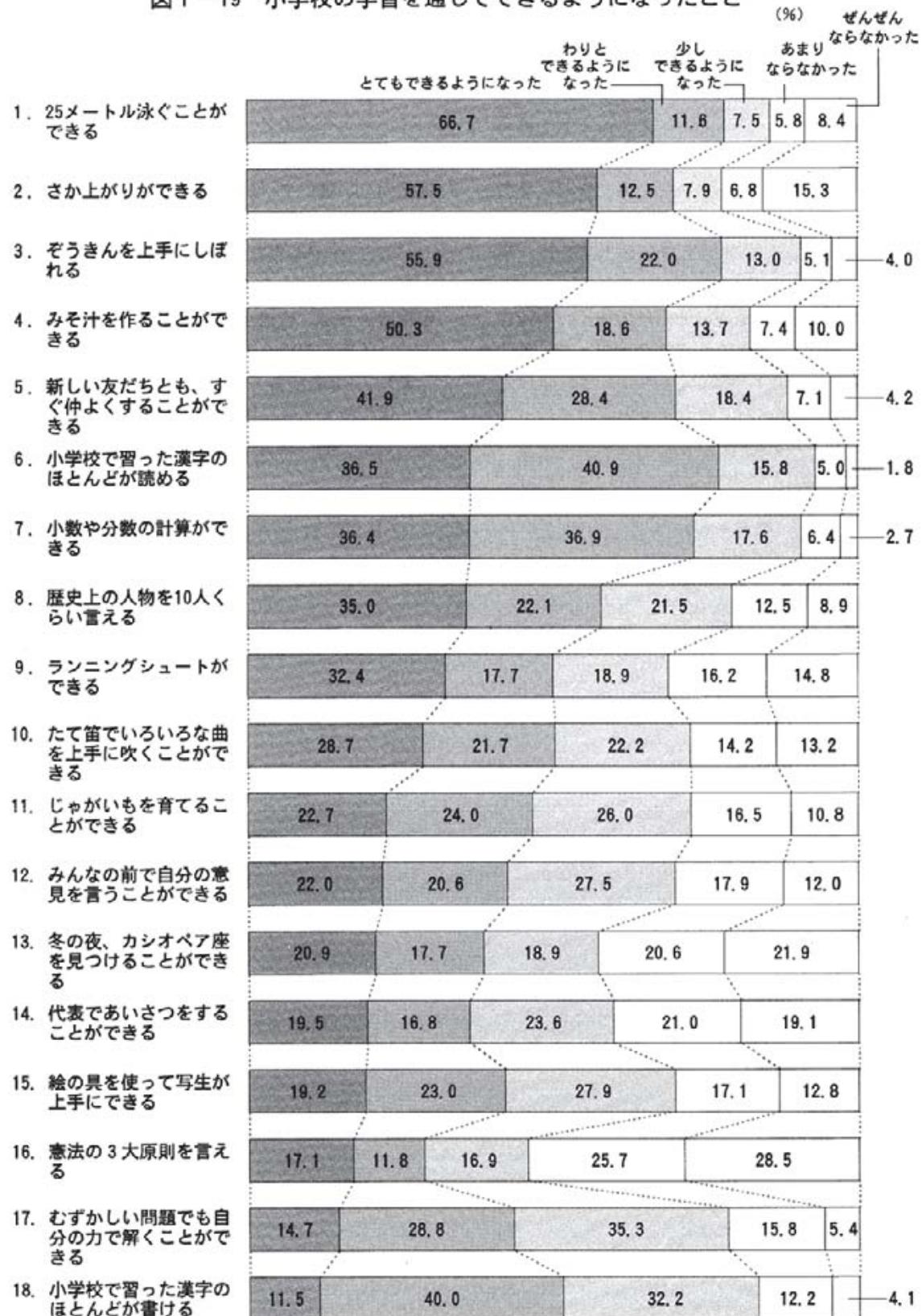
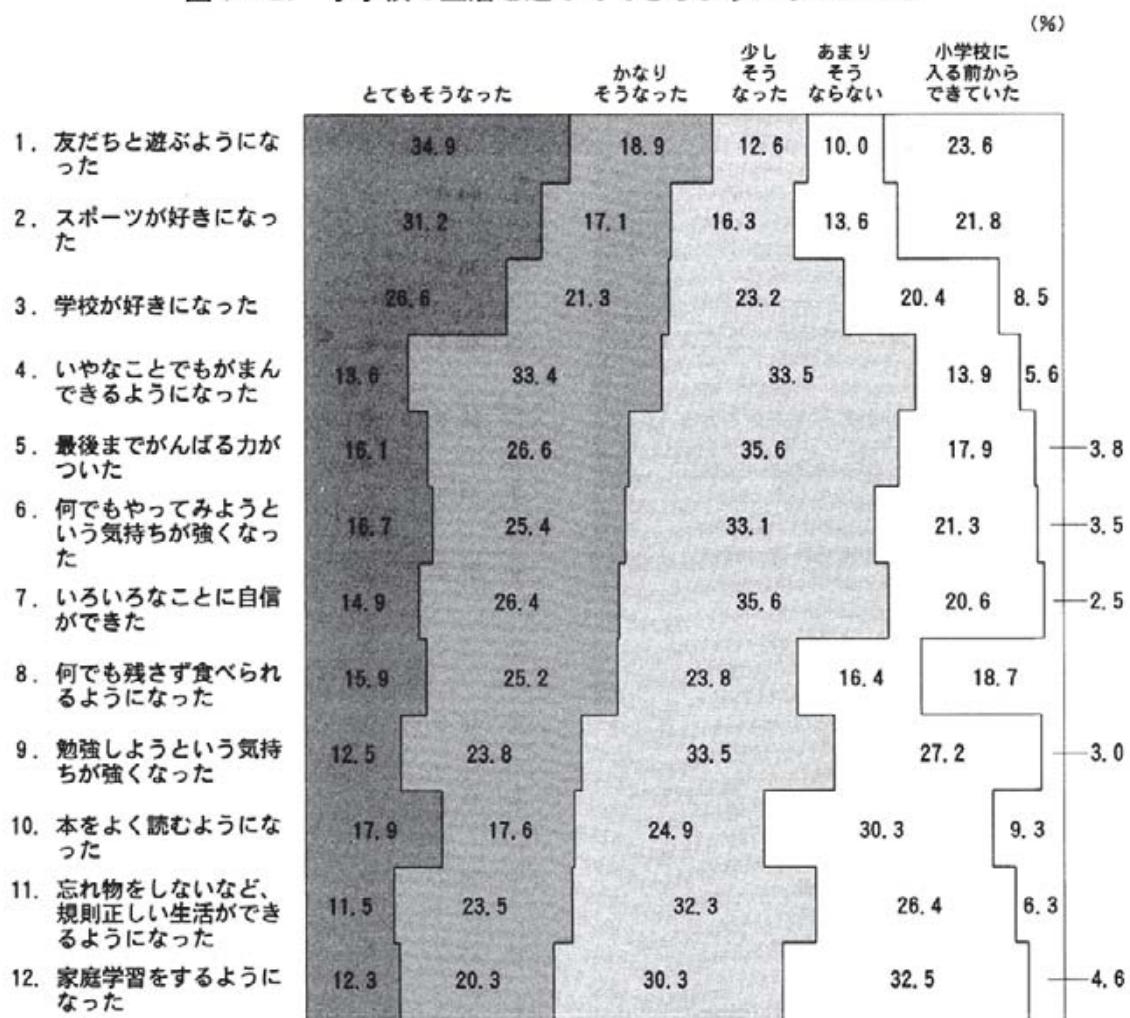


表1-17 小学校の学習を通してできるようになったこと × 性別

	(%)	
	男 子	女 子
1. 25メートル泳ぐことができる	① 68.4 >	① 64.8
2. さか上がりができる	② 55.7 <	④ 59.2
3. ぞうきんを上手にしぼれる	③ 50.5 <	② 61.2
4. みそ汁を作ることができる	⑦ 39.5 <	② 61.2
5. 新しい友だちとも、すぐ仲よくすることができる	⑦ 39.5 <	⑤ 44.2
6. 小学校で習った漢字のほとんどが読める	⑨ 37.4 >	⑦ 35.6
7. 小数や分数の計算ができる	⑤ 42.9 >	⑧ 29.9
8. 歴史上の人物を10人くらい言える	④ 46.0 >	⑨ 24.0
9. ランニングシュートができる	⑥ 41.4 >	⑩ 23.2
10. たて笛でいろいろな曲を上手に吹くことができる	⑯ 18.3 <	⑥ 39.0
11. ジャガイモを育てることができる	⑩ 24.5 >	⑬ 20.8
12. みんなの前で自分の意見を言うことができる	⑪ 23.3 >	⑭ 20.7
13. 冬の夜、カシオペア座を見つけることができる	⑫ 21.3 >	⑮ 20.4
14. 代表であいさつをすることができる	⑯ 17.6 <	⑫ 21.4
15. 絵の具を使って写生が上手にできる	⑰ 16.4 <	⑪ 22.0
16. 憲法の3大原則を言える	⑭ 19.0 >	⑯ 15.2
17. むずかしい問題でも自分の力で解くことができる	⑯ 19.8 >	⑯ 9.6
18. 小学校で習った漢字のほとんどが書ける	⑰ 10.5 <	⑰ 12.4

「とてもできるようになった」割合

図1-20 小学校の生活を通してできるようになったこと



## ●未来像と自己像))

学校でのさまざまな体験は、子どもたちの発達や心の中に、どのような影響を与えるのだろうか。ここからは、小学校を卒業した子どもたちが、どんな未来像や自己像をもっているのかを探っていく。

図1-21は、子どもたちに「将来どんな生活を送れると思うか」をたずねたものである。

「とてもそう思う」と「わりとそう思う」を合わせてみると、7割の子どもたちは、「将来幸せに暮らせる」と思っている。しかし、「仕事をバリバリやれる」とか、「よい父親（母親）になれる」では、約半数になってしまう。そして「希望の高校・大学に入れる」ということになると、「そう思う」割合は3

割をこす程度になってしまう。

このように、子どもたちの未来に向けての思いは、非常に現実的であり、夢というよりは、むしろ自分自身で低く押さえ込んでいるような感じさえするのである。

それでは、子どもたちは自分自身については、どのように考えているのであろうか。図1-22に示したように、すべての項目で「と

てもそう」と、自分に自信をもっている子どもたちは少ない。そして「最後までがんばる」では、半数近くの、また「礼儀正しい」では、半数をこえる子どもたちが、「そうでない」と答えている。ふだん接している子どもたちの姿より、自分自身を過小評価しているような感じさえみうけられる。

図1-21 将来の生活

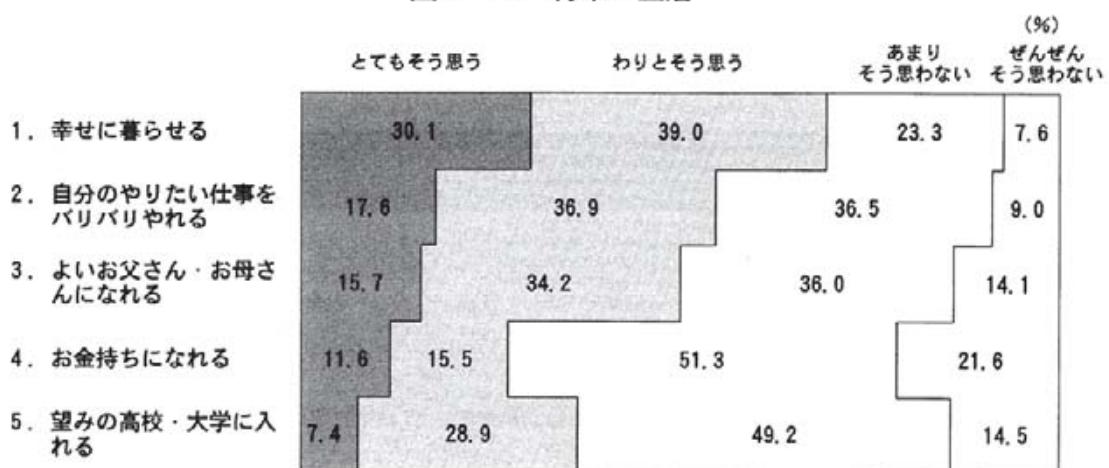
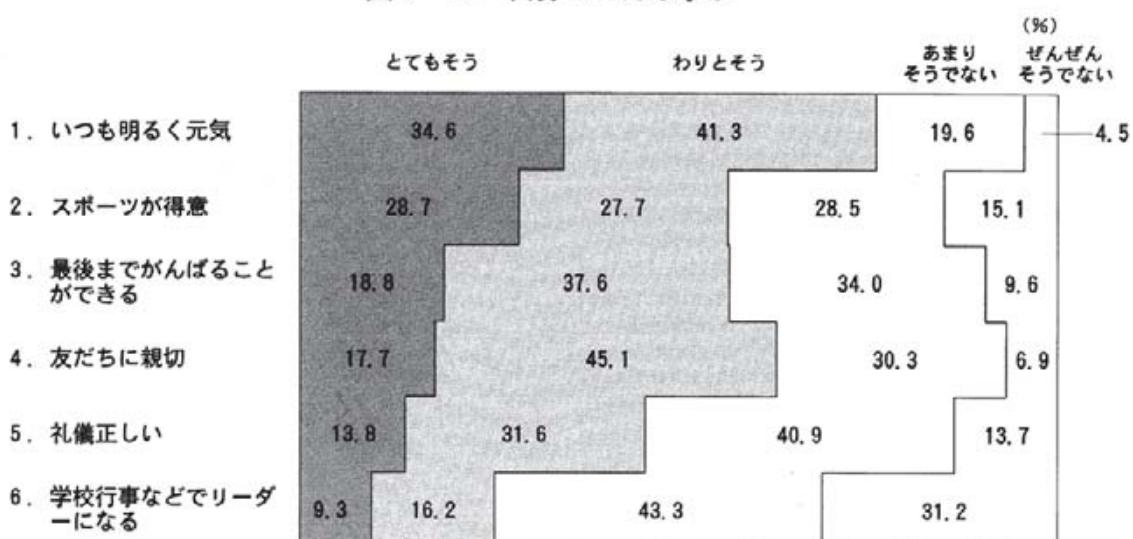


図1-22 自分はどんな子か



## ●自己像を高くもつ子の分析))

そこで自己像の項目の中から、「明るく元気」と「最後までがんばる」、そして「友だちに親切」の3項目を抜き出し、図1-23に示した方法で、自己像の高い群と低い群を算出し、それぞれの群が小学校でどんな体験を

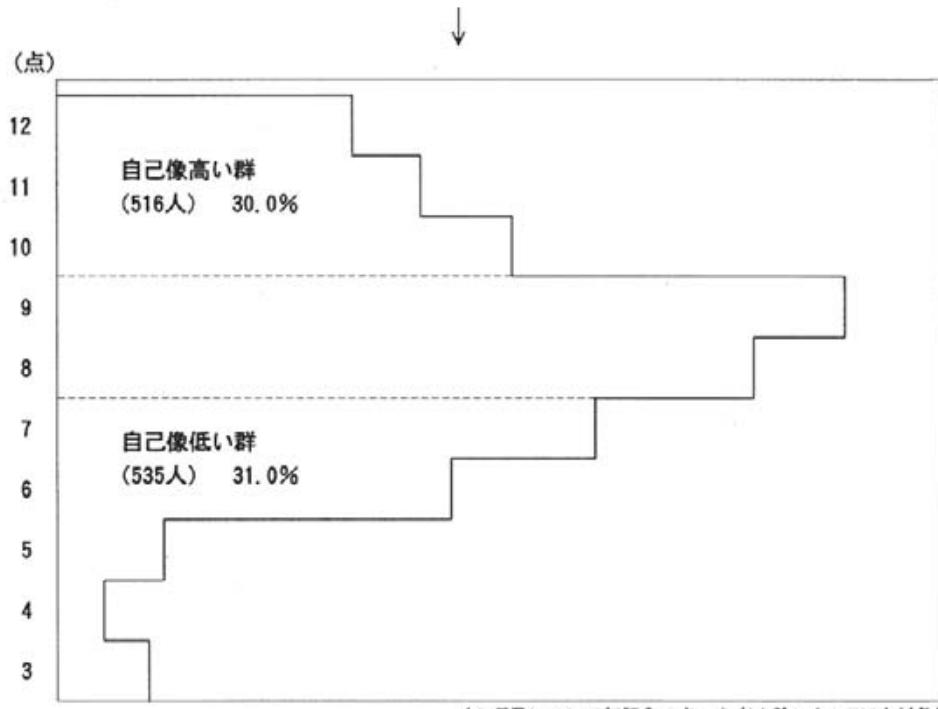
もっているかを探ってみた。

図1-24は、自己像の高い群と低い群が授業中、どんなことを感じていたのかをみたものである。図中A／Bは、自己像の低い群(B)が体験した割合を1としたとき、高い群(A)が

図1-23 「自己像」加算点の分布

	とてもそう	わりとそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない
1. いつも明るく元気				
2. 友だちに親切	4点	3点	2点	1点
3. 最後までがんばることができる				

〔上記の3項目を得点化して、加算した合計点を、「自己像」得点とした。〕



どのくらいの割合で体験していたかを示す数値である。

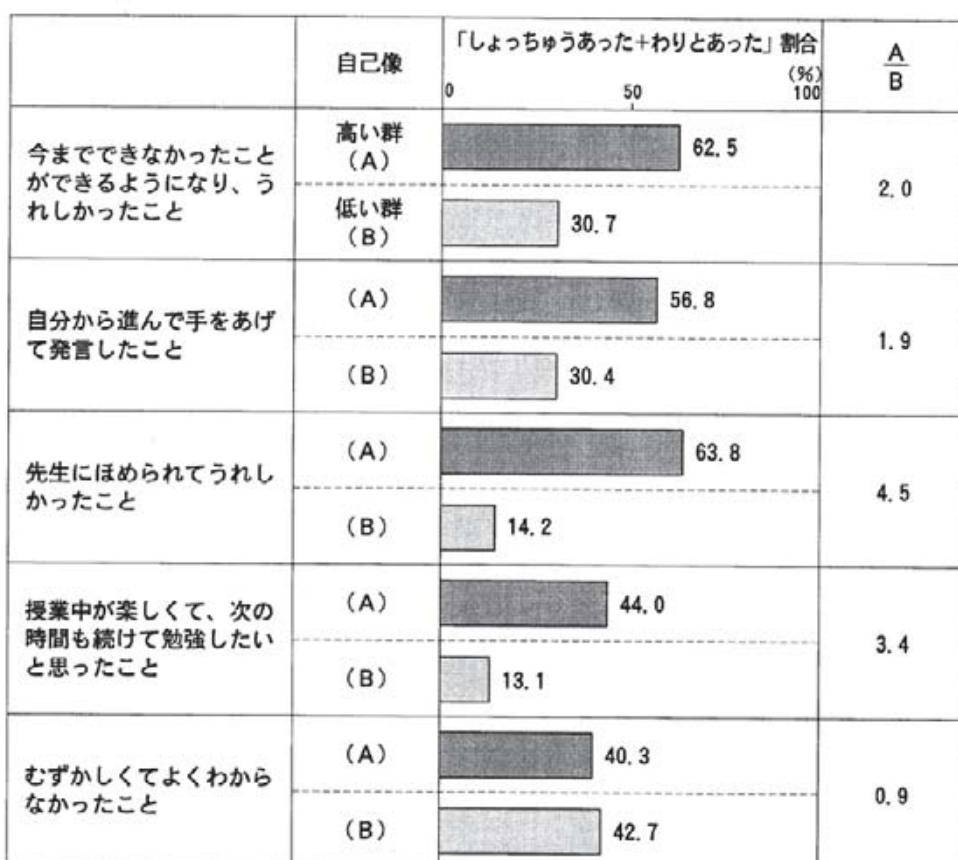
一番大きな違いが認められたのは、「先生からほめられてうれしかった」という体験である。自己像の高い群が64%の割合で「しょっちゅう」または「わりと」ほめられてうれしかったと答えているのに対して、低い群では14%の子どもたちしか、ほめられた体験をしていない。低い群に比べ高い群は、なんと4.5倍の子どもたちが、ほめられてう

れしかった体験をもっているのである。

同様に図中の数値をみていくと、自己像の高い子の授業中は、先生からほめられ、授業に楽しく取り組め、そして今までできなかつたことができるようになったと成長感覚を味わい、自信をもって積極的に手をあげ、発言をする。そのようなサイクルがうまく循環し、自己像が高まっていくという図式がみられる。

その一方で、「むずかしくてよくわからなかったこと」は、自己像の高い群も、低い群

図1-24 授業中の体験 × 自己像



も同様に体験しており、そのようなつらい体験は、自己像の違いにはあまり結びつかないようである。なんといっても授業中の体験では、教師がほめることが一番大きな要素となっている。

次に、子どもたちの休み時間などの遊び体験について図1-25に示した。

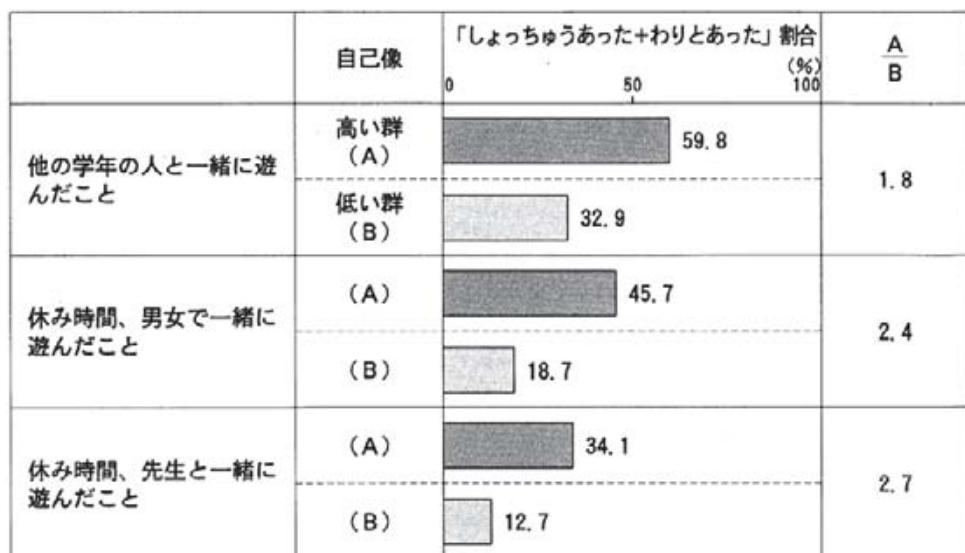
ここでも「先生と一緒に遊んだこと」が高い群と低い群では2.7倍と、大きな開きくなっている。フリーな休み時間に固定化され

た友人ではなく、さまざまな友だちとふれあうことが、自己像を高めていくといえそうな結果である。

子どもたちの自己像を高めていくうえで、教師の存在が大きいことがいくつか指摘されたが、最後に教師とのかかわりをまとめてみたい。

図1-26に示すように、自己像の高い子はほめられた体験をたくさんもち、逆に低い子は、ほめられた体験が少ないことがわかる。

図1-25 遊びの体験 × 自己像



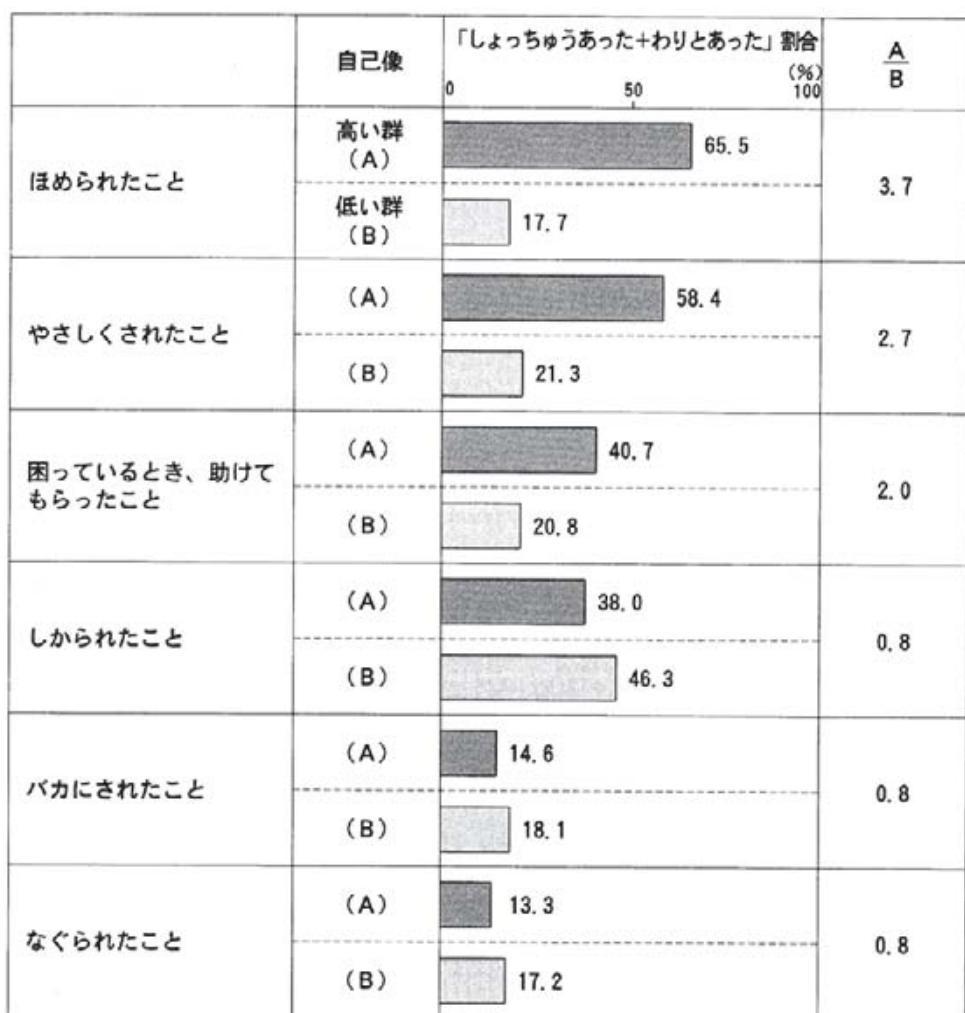
しかし、ここでも教師からしかられたといつたやな体験は、自己像にそれほど関係してはいなかった。

さて、ここまで「教師は自己像を高めるうえで大きな役割がある」と言ってきたが、逆に考えれば、もともと自己像の高い子どもたちから自信を失わせたり、明るさを失わせたりしていくのに、教師または学級集団が作用

していたとも考えることができる。

小学校教育のねらいは、なんといっても子どもたちに、明るい自己像をもたせ、自らの力で未来を切り開いていったり、困難を乗り越えていけるような強い力を育てることにあるだろう。教師はもっともっとほめてあげて、子どもたちに「やれる」という自信をつけさせてあげることがとても大切に思われる。

図1-26 教師との体験 × 自己像



## 小学校の生活を振り返って「あの日はいい一日だった」と思う日

<b>(男子)</b>			
・休み時間や放課後みんなで遊んだ日	22	い今までがんばってきた組み体操を力一杯 できたこと	
・卒業式	21	6年生の運動会です。最後の運動会なので 準優勝に終わったけど他のチームが帰って から、もう一度応援合戦をやったこと	
・修学旅行、林間学校、移動教室の日	18	組み体操で3段塔が完成したことなど	
・体育のある日	13		
・球技や運動会でがんばった日	6	・先生にほめられた日	5
・マラソン大会の日	4	・先生が数人の子をすごくおこって、先生によ くないことをしたと言いにいって、みんなで わかりあえたこと。みんなが泣いたこと。	
・学活でサッカーなどをした日	5	先生と生徒が喧嘩したとき、クラスのほとん どが泣いた。先生もいた。この件の関係	5
・学級会でお楽しみ会をした	5	・バスケット部が関東大会で優勝したとき	3
・4時間だった日	3	・マラソン大会の日	
・100点だった日		・音楽会のあった日	
・表彰される日、朝からとても気分がよかった		・学芸会のあった日	
・マラソン大会で1位になった日		・賞状をもらったとき	
・学芸会で「まくま」をやったとき		・3学期の成績のとき	
・さか上がりができなかったけど、できるよう になったとき		・授業がよくわかったとき	
・先生にほめられた日		・テストが4枚くらい返されて、全部100点だ ったこと	
・みんなで団工のとき作った土器を焼きながら、 その火で焼き芋を作ったこと		・5年生のとき、先生に応援してもらい、生ま れて初めて25メートル泳げたとき	
・できなかった問題ができてうれしかったとき		・音楽の時間1つの曲を作り上げたとき。それ までクラスのみんながバラバラだったので1 つになれてよかったです	
・野球でホームランを打った日		・楽器クラブで、先輩が教えてくれたり後輩と 一緒に練習して自分もうまくなかったこと	
・児童会祭り		・学校のお祭りを自分でもテキパキできたとき。 6年生だったけれど、みんなに頼りにされた 日	
・2月3日先生が出張でいなくて、受験で生徒 も少なかったので、給食の豆をみんなで投げ あった日		・私は登校拒否だった頃、みんなや先生が助け てくれた。そんなときがよかったです	
・先生がいなかった日		・給食の残り物を食べながら帰ったとき	
・嫌いな先生が学校からいなくなった日		・友だちと遠出して、お昼と一緒に食べたり、 遊んだり、買い物をしたこと	
・卒業式の前に学校でファミコンをしたりお菓 子を食べた日		・私の誕生パーティーを大の仲よしの友だちに 開いてもらつたこと。私の知らないところで 計画を立て、すごくすてきなパーティーをし てくれたすばらしい友を今でも忘れません	
・小学校の帰り道で100円拾った日		・卒業式が終わった後、中国料理をクラスの女 子と食べに行つたり、ボーリングをしたこと	
<b>(女子)</b>		・4年生のとき、私とある女の子と男子2人で 交換日記をつけたり、4人で遊んだり、ある 人に追いかかれられているとき助けてくれたり、 あの日は本当にいい日だった。戻れるならあ の日に戻りたい	
・卒業式と謝恩会や送る会		・委員会の最後の日に先生と一緒にお菓子を食 べたこと	
〔卒業式の思い出作りに男女みんなで遊んだ ことが最高〕	78	・入学してから1、2週間たつた頃で、まだ何 も知らなかったとき	
〔卒業式に先生がしてくれた話など〕	62	・憧れの先輩に会えた日	
・休み時間や放課後みんなで遊んだ日	62	・先生の結婚式の日	
〔男女で仲よく遊べたこと 友だちや先生と話したり、一緒に遊ぶとき 学級の道具で遊ぶとき、話したり悩みを言 ったりなど〕	61	・担任の先生が休んだとき	
・修学旅行、林間学校、移動教室の日	61	・上を見たら青1色の青空だったこと	
〔日光の夜、大騒ぎして、先生にしかられた けど、とてもよかったです キャンプファイアなどをして遊んだこと 自然教室の山登り、スキー、キャンプでチ ントを協力してはったことなど〕			
・球技や運動会でがんばった日	20		
・体育のある日	12		
・学級会でサッカーやバスケットボールなどを した日	7		
・学級会でお楽しみ会をした	6		
・運動会	5		

(数字のないのは1例のみ)